

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.155

2006年4月

平成17年度卒業式が挙行される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

目次

●ニュース	
平成17年度卒業式が挙行される	2
第8回経営協議会を開催	10
研究成果発表会「名大発一省エネ推進と地球温暖化防止」を開催	10
平成18年度高等研究院研究プロジェクトが決定	12
卒業・修了留学生を送る夕べを開催	13
安全衛生管理講習会を開催	13
●知の先端	
シマウマが縞を持つ理由	14
近藤 滋（大学院理学研究科教授／高等研究院教授）	
自由の構造と分類	16
大屋 雄裕（大学院法学研究科助教授）	
●知の未来へー若手研究者の紹介	
高機能超短パルス光源の開発と応用	18
西澤 典彦（大学院工学研究科助教授）	
●オフタイム	
山歩き	19
島岡 清（総合保健体育科学センター長）	
●教育のデザインとプラクティス	
国際開発分野における自立的研究能力の育成	20
廣里 恭史（大学院国際開発研究科教授）	
大橋 厚子（大学院国際開発研究科教授）	
●世界につながる	
地域特性にもとづく熱帯アジア臨海域の自然災害軽減に関する研究連携	22
海津 正倫（大学院環境学研究科教授）	
●学生の元気	
平成17年度名古屋大学総長顕彰 7名2団体表彰	24
●部局ニュース	
公開シンポジウム「源氏・賢治・ジュリエット」を開催	25
平成17年度教育学部附属学校卒業式を挙行	25
国際シンポジウム「法実務技能教育の現状と将来」を開催	26
国際シンポジウム「国際的民事訴訟の現状」を開催	27
シンポジウム「社会の求める人材と大学院教育のあり方」及び経済学研究科懇談会を開催	27
省エネ技術及び温暖化ガスの排出量取引演習を実施	28
情報文化セミナー・シンポジウムIIを開催	28
UFJセントラルリース寄附講義「環境問題への挑戦」を開講	29
公開レクチャー「映像の記憶／記憶の映像」を開催	30
シンポジウム「地球惑星科学を語ろう」を開催	30
国際シンポジウム「文理融合型エコシステム科学の展開」を開催	31
エコピア融合プロジェクト・シンポジウムを開催	31
名古屋大学学術機関リポジトリ公開記念講演会を開催	32
アイソトープ総合センター防災訓練を実施	32
2006年国際戦略ワークショップを開催	33
文学研究科「アートキッズ'06」を開催	33
●名大を表敬訪問された方々 平成17年12月16日～平成18年3月15日	34
●新任役員等の紹介	35
●資料	
平成18年度名古屋大学組織図	36
●受賞者一覧	37
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成18年2月16日～3月15日	39
●博物館からのお知らせ	
第9回名古屋大学博物館特別展「スポーツと名古屋大学：する・みる・つくる」	42
博物館野外観察園の一般公開がはじまる	42
●イベントカレンダー	43
●ちょっと名大史	
揚輝荘衆善寮一戦前名古屋の留学生宿舍	44

平成17年度卒業式が挙行される





穏やかな晴天に恵まれた3月27日(月)、平成17年度名古屋大学卒業式が、豊田講堂において挙行されました。午前10時から修士・博士学位記授与式が、続いて午前11時50分から学士学位記授与式が行われ、会場の豊田講堂は卒業生で満員となりました。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、来賓の方々が見守る中、平野総長から修士課程及び博士課程前期課程修了生1,586名に修士学位記が、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)修了生29名に専門職学位記が、博士課程及び博士課程後期課程修了生245名に博士学位記が、また、学部卒業生2,178名に学士学位記がそれぞれ授与されました。

平野総長は、大きく開かれた将来へのスタートラインに立つ修了生及び卒業生に対し、それぞれ送別のことを贈り、激励しました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。

次に、大学院工学研究科博士課程前期課程修了生の伊藤 誠さんが修了生総代として、また、理学部卒業生の竹内ふみさんが卒業生総代として、本

学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会副会長の太田和宏氏(前株式会社デンソー取締役副会長)より、所用のため欠席された同同窓会会長の豊田章一郎氏(トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長)からの祝辞の紹介があり、ご自身からも、心のこもった祝辞をいただきました。

太田氏は、「志に対する使命感を持って、前向きに強く活動してください。」と述べられました(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)。

卒業式終了後には、豊田講堂前に詰めかけた後輩たちから花束を贈られたり、胴上げをされたり、友人や後輩、保護者などと記念撮影をする卒業生の姿があちらこちらで見られました。

卒業式の様子は、卒業生以外の学生に対しては、豊田講堂内ホール及びシンポジオンホールにおいて、卒業生の保護者に対しては、経済学部カンファレンスホールにおい

て、また、本学ホームページ上においても、ライブ中継され、間接的に多くの方々がこの晴れがましい式典に参列しました。

なお、卒業式の模様は、現在、本学のホームページ(http://www.nagoya-u.ac.jp/broad/event/gra/h18_nyugaku.html)でも視聴することができます。



総長の辞（平成17年度大学院修了式）

平野 眞一



名古屋大学は、本日ここに平成17年度大学院修士課程及び博士課程前期課程修了者1,586名に修士学位記を、法学研究科専門職学位課程（法科大学院）修了者29名に専門職学位記を、博士課程及び博士課程後期課程修了者245名に博士学位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに役職員を代表して心からお祝いを申し上げます。

皆さんは、社会に出られる方、または後期課程へ進学される方とそれぞれ異なる道を歩まれますが、一つの課程を修了できたという達成感と、これから始まる新しい生活への期待感に満ちた澆刺とした気持ちで、今日ここに臨んでいることと思います。それが私にも強く伝わってきます。明るく、大きく開かれた将来へのスタートラインに立っている皆さんに、心から拍手をお送りします。

大学院を修了された皆さんは、活用できる学力を身につけ、また学問のあり方、学び方を身につけるとともに、先導的な学術研究の一翼を担い、学術の進歩に貢献して下さった方々であります。20世紀以降、学術・科学技術は目ざましい発展をしてきました。あなた方の努力によって、さらに一歩進歩したはずであります。将来とも発展していくであらう。



とはいえ、現在、学術・科学技術が迫られている課題はいよいよ明確になってきております。20世紀は、科学技術において特に大きな進展があり、物質的には豊かさを享受できるようになって来ました。しかし同時に、人とのインターフェース、精神的・文化的な配慮が弱かったことは否めません。21世紀にあつては、学術・科学技術は「光」の面を進展させるとともに「影」の面を制御して、全地球規模での安心・安全で持続可能な発展を図ることが最も重要な課題であり、私たちは、その実現に努めなければなりません。

現在は残念ながら、政治、経済においても、また市民生活のなりわいにおいても、システムが崩壊してきております。物質的・経済的側面に偏ることなく、精神的・文化的側面にも充実したバランスのとれた人間性豊かな人が軸にならねばなりません。皆さんは、それぞれの分野において、ある一つの観点から物事を深く追求して、その成果を論文に纏めてきたであらう。学問が急速に深化し、分化しつつ発展している一方で、社会においては様々な輻輳した問題に直面します。どんなに状況が変化しても変わらない学問の基礎を蓄積し続け、新しいことに立ち向かわねばなりません。

自分の「IDENTITY」を大切に、大学院で身につけた考え方をもとに、学問に裏打ちされた自信と精神力で、積極的に勇気をもって問題解決に立ち向かってもらいたいと希望します。名古屋大学で学んだことに、また精一杯努力して今日を迎えたことに自信を持ってもらいたい。今後とも、絶えず学ぶことを忘れずに、前向きに精一杯生きてもらいたい。

本日学位記を授与された皆さんの中で、199名の方が留学生であります。この方々は、国を離れ、言葉や文化が異なる我が国で、将来の自国への貢献、世界への貢献を志して困難な環境の中で努力して、本日の栄えある日を迎えら

れました。名古屋大学では、毎年約1,200名の留学生が学んでおられます。キャンパスは、小さな地球でもあります。教室で、また研究室で、色々な形で交流がなされていたと思います。国内外の学生が一つのキャンパスで過ごし、互いの文化や考え方を理解できたことは、皆さんの将来における重要な財産です。地球上の資源が有限であるという観点からすれば、また地球規模での環境対策から見ても、一国でことが成就する状況ではありません。グローバル化していく世界の中で、各国は主権を大切に、お互いがしのぎを削りながら、かつ地球規模的な問題については協調して問題を解決していかなければなりません。そのためには、それぞれの国の歴史、文化、宗教を尊重しあうことが前提でありますし、加えて、常日頃の学習に裏打ちされた自信と客観的な判断力を身につけなければなりません。多様性を尊重し、新たな秩序ある社会関係を構築していく必要があります。

今からの社会は、若くて活力ある皆さんが築いていていただきたい。新しい世界を創るのは皆さんです。責任感ある若い方が目立って良い社会にすべきであります。そのような社会をリードするには、実務能力に加えて、人間性の観点から「選ばれた人」が必要であります。また、「選ばれた人」には、責任と義務が生じます。皆さんには、人間を信じ、愛する能力を養って、それぞれの分野で、社会をリードする「選ばれた人」になってもらいたい。

名古屋大学の卒業生には、漢字の「実」の字が良く当てはまるとの評価を頂いております。例えば、「実直」「実行力」「実力」「誠実」などであります。一方、「積極さ」が足りないとも評されます。名古屋を評して言われる「愚直さ」は恥ずかしいことではありません。実質を重んじて行きましょう。良い点は大切に、大いに伸ばし、しかし驕ることなく、自信を持って、翔いてください。「選ばれた人」になってください。



最後に、もう一度皆さんに呼びかけたい。

「高い志を持ちましょう。その実現に向かって進みましょう。」若いときは、自分の夢に自信が持てないかもしれないし、また不安でありましょう。それは、可能性が秘められていることへの証でもあります。精一杯、高い志を持ち続け、自分が自分に真摯に対峙すれば、夢が現実のものになります。夢の実現に結びつく「目標設計力」を磨き続けましょう。

精一杯生きていると、壁にぶつかり、“自分”を見失いそうな試練にあう時があります。私は、そのときにはいつも相田みつをさんの「肥料」という題の詩を思い返しています。漢字では、植物を育てる「肥料」であります。

「肥料」

あのときの あの苦しみも あのときの あの悲しみも
みんな肥料に なったんだなあ
じぶんが自分に なるための

チャレンジ精神を失わずに、前を向いて着実に進みましょう。

皆さんの将来の活躍を心から期待し、大学院修了生への辞とします。

総長の辞（平成17年度学部卒業式）

平野 眞一

皆さん、ご卒業おめでとうございます。

名古屋大学は、本日ここに平成17年度の学部卒業生2,178名に学士の学位記を授与いたしました。皆さんに本学の役職員を代表して、心より、洋々たる将来に向けての船出をお祝いいたします。

大学での勉学を糧に希望に満ちて新しく旅立ちされる皆さんをお送りすることは私どもにとって誇りであり、喜びであります。皆さんの大学卒業という達成感と、これから始まる新しい生活への期待感に満ちた澁刺とした気持ちが私にも強く伝わってまいります。明るく、大きく拓かれた将来への出発点に立たれている皆さんに拍手をお送りします。

皆さんは、卒業式を迎えるにあたって、名古屋大学に入学したときの心意気や、また在学中の出来事を思い出していたことでしょうか。名古屋大学での学生生活は、充実したものでありましたか。若き日のこの貴重な時に多くのことを学ばれたことでしょうか。在学中に得た「友人」と「学問」は皆さんの財産です。大切にしてください。

皆さんの中の約半数が大学院へ進学され、また就職するか独自の道を進む方が半数おられます。大学院へ進学する方も数年後は社会に出て活躍されることとなります。

皆さんの将来に期待して、激励の言葉を贈りたいと思います。

21世紀に入って考えてみますと、人間社会が迫られている課題はいよいよ明確になってきていると思います。急速に発展してきた科学技術は、人間の福利という点では「光」をともしている訳ではありますが、同時に、一方では生命を脅かすような「影」をももたらしていることは事実であります。21世紀を生きる私達は、この「光」の面を進展させ、さらに、「影」の面を制御して、全地球規模で持続可能な発展を図ることが責務であります。特に、若くて活力ある皆さんへの期待は大変大きいものであります。

また、わが国では、政治、経済を含めた各種のシステムの崩壊が起きていることも事実であります。一方では、最近、海外では期待と警戒心をもって「日本は再び朝を迎えた。」と評しております。本当に発展を迎える朝かどうかは、今からの対応次第であり、若く、チャレンジ心旺盛な皆さんのような若者が目立ってよい社会にすべきであります。

私は、あなた方に大いに期待しております。「夢とロマンをもち続け、その成就に向けて努力してもらいたい」。私は、夢は人を育て、また夢見る人々の努力によって社会が変わり、発展することを確信しております。また、夢を実現しようとして、チャレンジし、もがいている時は、苦勞しているとも思わない、時には実力以上の結果がでるものであると信じております。

今は、夢が持てない社会でありましょうか。国際問題、経済問題、地球環境問題、二極分化など社会が直面している諸問題をかかえ混迷している現代は、これまでとは異なった意味での、解決に向けた夢の種が一杯あります。若い皆さん方が、目立って良い、活力ある社会を再構築しなければ、社会の建て直しは容易ではありません。これからは、世界の中で誇りを持って、かつ世界と共生していかなければなりません。

そのためにも、皆さんが、グローバル社会の中で生きていくための世界観を身につけられることを希望します。常に、世界で起きていることを敏感に捉えて、世界の動きを、勇気をもって注視してもらいたい。特に、その国の文化、歴史を尊重して、お互いの立場を理解しあってもらい





たいと思います。国際社会で相互交流するためには、同時に、自分の国の文化を学んで接すること、自分が依って立つ基盤を大切に、すなわち自分の存在意義「IDENTITY」を確立してもらいたい。

社会は様々な異なる文化、異なる宗教、異なる価値観を持つものが共同、協調して構成するものであります。多様性を尊重するとともに、人の痛みが分かる、相手の立場で物事を考えるように努められることを希望します。

資源のない日本は「知」を生かして国際的に生き、かつ貢献する国でありたいと思います。「知」を尊重する社会をつくらねばなりません。皆さんが活躍する21世紀は、「知」の世紀であります。

名古屋大学の卒業生は、漢字の「実」の字がよく当てはまる、と言われます。「実直」「実行力」「実力」「誠実」など誉め言葉を頂いておりますが、一方では「組織をリードする覇気が弱い」とも言われております。高く評価されている点は真摯に受けとめて、驕ることなく、しかしその特長を大切に、そして直すところは努力して直してもらいたい。

大学院に進学される皆さんにおいては、ここでもう一度、大学院に進学する志を確かめ、自分が置かれている立場を理解して、大学院の進学に備えてください。環境がどんなに変化しても変わることのない学問の基礎を身につけ、物事を俯瞰的に見ることができる力を自分のものにする心構えを持ってもらいたい。

また、就職される皆さんにおいては、自分の足元をしっかり見つめて、自分自身に精一杯投資して、周りから必要とされる人間、組織から「貴方がいないと困る」と言われる人となれることを期待しております。皆さんは、大学では、それぞれの分野でかなりの知識を身につけて卒業を迎えたことと思います。

しかし、今後、社会で出会う問題を適切に解決して行くために、常に勉強し続けてもらいたいと思います。さらにこれまで学んでいない分野の知識を勉強しなければなりません。このような時には、大学で学んだ学問の仕方が役に立つと思います。

また、皆さんの引き出しに入っている知識を融合し、活用してください。ある意味では、学生の気持ちを今後とも失うことなく、自分に投資し続けてください。自分への投資は、環境の変化があっても失われることはありませんし、越えなければならない壁にぶつかった時ほど、大きな力を発揮するものです。壁にぶつかって自分を見失いそうなきがあるかもしれません。そのような時は「ちょっと立ち止まって自分を振り返る」ことも必要でありましょう。

将来を担うのはあなた方です。皆さんが高い志を持って、胸を張り、将来の人類社会のために頑張ってくれることを期待しております。それぞれの道で、最善を尽くし、活力のある社会を創るために自信をもって活動されることを希望しております。

以上をもって、卒業生への辞といたします。おめでとうございます。



来賓祝辞

太田 和宏 名古屋大学全学同窓会副会長
前株式会社デンソー取締役副会長



まずもって、ただ今、新しく学士になられました皆さん、大変おめでとうございます。ご家族の皆様も大変お喜びのことと存じます。心よりお喜び申し上げます。

本日は、まず初めに全学同窓会会長の「豊田章一郎さん」

から託されました祝辞を読ませていただき、その後、先輩として私から2、3、皆さん方にメッセージをお伝えしたいと思います。

それでは祝辞を読ませていただきます。

皆さん、名古屋大学のそれぞれの学部の課程を無事、卒業されたとのこと、誠におめでとうございます。名古屋大学全学同窓会を代表して心よりお祝い申し上げます。名古屋大学全学同窓会は2002年10月に発足いたしました。それまでも各部局別に同窓会はあり、それぞれに立派に活動しておりましたが、大学法人化を含め、大学を取り巻く環境は大きく変化し、社会が大学に求めるものも大変に厳しくなってきました。このような変化に対応するには、大学と社会の連携の強化が極めて大切で、特に大学とその出身者との密接な協力が、その核として必要になっており、全学同窓会はこのニーズに応えるべく組織されたものであります。

全学同窓会は、発足以来、急速にその規模を拡大しており、関東、関西、浜松地区に国内支部を、韓国、タイ、上海、バングラデシュに海外支部を作り、連携を強めてまいりました。私は21世紀の名古屋大学が国際的にも評価をさらに高め、さらに日本を支える大学になることを強く望んでおります。幸い名古屋大学は平野総長殿のすぐれたリーダーシップのもとに、各方面で着々と成果を上げてきておられます。この大学の出身者である皆さんは、日本の、そして世界の将来を担うリーダーの一員となられるに違いありません。そのためにもどうか出身母体を中心に、大学を、そして同窓会を大いに活用し、皆様の発展に役立ててください。

それと共に名古屋大学が研究、教育、社会貢献等の各方面で、世界屈指の成果を上げるためには皆様方の参画は極めて大切です、社会と大学を結ぶ絆ともなっていたきたいのです。この辺を充分ご理解いただき、大学および同窓会に対し暖かいご支援を賜りますことを強くお願いして私の挨拶とさせていただきます。

名古屋大学全学同窓会会長 豊田章一郎 代読



それでは私から2、3、先輩として皆様方にメッセージをお伝えしたいと思います。

その第1は、皆様方の多くは幼稚園から今日まで20年に近い間、勉学に励み知識の吸収に努めてこられて、今日、かなり高度なレベルまで到達されました。そして本日の栄えある日を迎えられるわけであります。これは皆様方ご自身の努力によるところが大であることは申すまでもありませんが、名古屋大学で学べる程の立派な素質と、そういった環境を提供してくださった両親はじめ立派な教育をしてくださった各段階での先生方、さらには友人、関係者の方々の支援があってこそだと思います。先ほど総代の方々も、そういう方々に対する感謝の言葉を申しておられましたが、まさにその通りでございます。これは皆様方が自分自身の力だけで今日まで来られたということではないのでありまして、決してうぬぼれないでいただきたいと思えます。同時に今日の自分は自分1人のものではない、社会の皆様サポートの賜物であると強く認識し、自分自身を大切にしてください。若い皆様方は今後いろいろな経験をなされるであります。時には喜びの絶頂に、時には失望のどん底に、またうぬぼれの感情に、さらに時には失意の悲しみの淵に沈むこともあるかと思いますが、いつの時も「自分」というものをしっかり持って、今日ある自分を見つめ、「その存在を大切に生きる」ということを忘れないでいただきたいと思えます。粗末にしないで下さい、これが第1の私の皆様方へのメッセージであります。

そして第2ですが、皆さん方は、世に優れた方々です。その上、素晴らしい環境とすぐれた先生方の指導を長年受

けられまして、高度な能力を身に付けられました。この優れた能力を是非、積極的に社会に生かす努力をしていただきたいと思えます。先ほど総長先生が、名古屋大学の卒業生は素質は優れているけれども、リーダーシップ、あるいは積極性の点でやや欠けるところがあるのではないかと申されましたが、私もそのように思えます。是非、皆様方、この辺のところを心得て、世に尽くす努力をしていただきたいと思えます。もちろん必ずしも「すぐ役立つ」ということはないでしょうが、大いに研鑽を積んでいただき、その成果を、社会に地球に人類のために還元していただくように、積極的であってほしいのです。遠慮深いということは一つの美德ではありますが、同時に、高い志を持って、その志に対する使命感を十分感じて、前向きに強く活動していただきたいものです。厳しいこと、つらいことがあった時に、それを乗り越えて努力し苦しんだあげくに出てくる知恵こそ本物です。是非つきつめて考え、素晴らしい知恵を出してください。

「一隅を照らす人」という言葉がございます。皆様方、必ずやそれぞれの分野で一隅を照らす人になられると信じておりますけれども、狭い一隅だけではなくて、「広い、より大きな範囲を照らす光」になってほしいものです。そのために大学で蓄えた知識は大変役立つものと思えますし、同窓会のネットワークや人的交流もそれに大きく役立つでしょう。大いに活用していただきたいと思えます。皆様ますますの発展を信じつつ、私のご挨拶を終わらせていただきます。

(祝辞は、大学院修了式と学部卒業式のそれぞれに頂戴しましたが、学部卒業式に頂戴した祝辞を掲載させていただきました。)

第8回経営協議会を開催

平成17年度の最後となる第8回経営協議会が、3月26日（日）、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

会議では、平野総長のあいさつの後、平成18年度年度計画、平成18年度学内予算配分額、名古屋大学職員給与規程等及び役員給与手当規程等の一部改正、職員の定年退職後の雇用に係る人事・労務関係規則等の一部改正について、



経営協議会の様子

各担当理事から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

続いて、管理運営・教育研究組織の改編、名古屋大学大学院の進路状況及び充足率、名古屋大学基金、役員の職務付加等について、総長及び担当理事から説明が行われました。

学外委員からは、平成18年度年度計画や平成18年度学内予算配分等について、貴重な意見が多数寄せられました。

なお、次回の経営協議会は、今年6月中旬に開催する予定です。

研究成果報告会「名大発－省エネ推進と地球温暖化防止」を開催

エネルギー問題研究会及びエネルギーマネジメント研究・検討会は、3月10日（金）、経済学研究科第一講義室において、大学院経済学研究科とエコトピア科学研究所の共催で、平成17年度エネルギーに関する文理融合研究合同成果報告会「名大発－省エネ推進と地球温暖化防止」を開催しました。

省エネに向けた研究会として、平成16年10月に発足したエネルギー問題研究会（主査：北川邦行エコトピア科学研究所教授）は、平成16年度からエコトピア科学研究所長（機構長）研究経費を受けて、新たな省エネ技術の研究・開発を、また、エネルギーマネジメント研究・検討会（主査：荒山裕行経済学研究科教授）は、平成17年度総長裁量経費を受けて実践的な省エネ施策立案を目指しており、両者は連携を取りながら、学内における省エネ対策の実施に向けた検討を行ってきました。

報告会では、初めに、杉浦理事（施設整備担当）から大学としての省エネに対する重要性についての説明があった

後、学内の省エネを推進し、地球温暖化対策を実施していくための「名大発」の取り組みとして、文系・理系の研究者、事務・技術職員及び学外関係者が一体となって学際的に進めてきた省エネに関する研究成果が発表されるとともに、経験、アイデア、実証データに基づいた具体的な省エネ対策の提案が行われ、学内関係者をはじめ、多数の企業関係者、他大学関係者など約90名の参加者は熱心に耳を傾けていました。

また、報告会中には、経済学研究科第一講義室に設置されている空気攪拌ファンによる快適空調化実験のデモンストレーションが行われ、頭上と床下との温度差を緩和することで快適空調の効果を実証しました。

情報交換会では、林 達也全学技術センター技術長から、今後の省エネ活動に対する同センターの支援体制の意気込みが述べられ、全学をあげた今後の省エネ推進活動に対して、のろしをあげる報告会となりました。

■研究発表内容

[エネルギー問題研究会]

「LED照明における省エネの基礎検討」

北川 邦行 (エコトピア科学研究所教授)

松浪 有高 (全学技術センター技術員)

「LEDによる面発光パネル」

森 幸一 (㈱東洋テクニカ代表取締役)

「追設凝縮器による空調機の高効率運転」

長谷川達也 (エコトピア科学研究所教授)

「中低温廃熱の回収と有効利用技術」

小林 敬幸 (エコトピア科学研究所助教授)

中川 二彦 (エコトピア科学研究所客員教授)

[エネルギーマネジメント研究・検討会]

「電力消費の節約可能性に関する意識調査と空気攪拌による空調効率改善効果の検証」

荒山 裕行 (大学院経済学研究科教授)

藤丸 隆志 (施設管理部施設管理課技術職員)

「学内エネルギー需要分析と各種省エネ方策の効果検討」

加藤 丈佳 (大学院工学研究科助教授)

熊澤 正幸 (全学技術センター専門技術職員)

「省エネ行動促進のための介入手法検討」

唐沢かおり (大学院環境学研究科助教授)

元吉 忠寛 (大学院教育発達科学研究科助手)

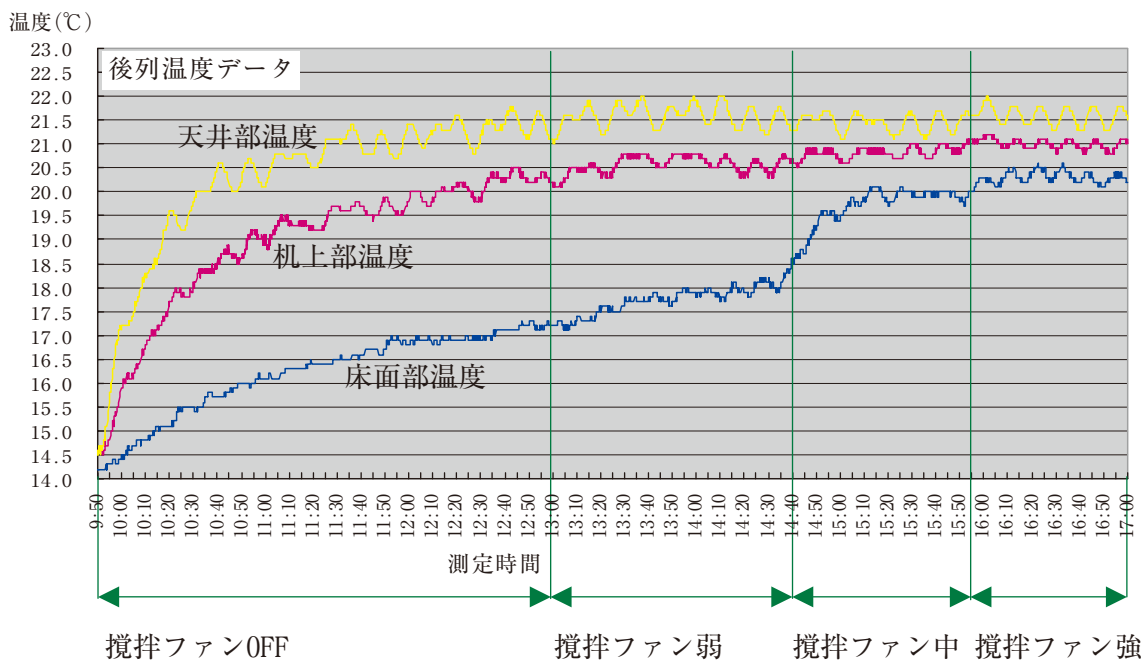
「個別空調における遠隔監視の省エネ効果」

荒山 裕行 (大学院経済学研究科教授)

田中 英紀 (施設計画推進室助手)

「大学のエネルギーマネジメントの現状について」

加藤 好孝 (施設管理部施設管理課長)



図：経済学研究科第一講義室での空気攪拌ファン稼働による空調効率化運転の効果。攪拌ファンを運転させることで、床面と机上の温度差が縮まったことが分かる。

出典：施設管理課・藤丸 隆志氏報告会資料
計測記録：26日（2月日）AM9:50 - PM17:00、天候・雨、平均外気温10.1℃、設定温度20℃

平成18年度高等研究院研究プロジェクトが決定

平成18年度高等研究院研究プロジェクトが、2月28日(火)、高等研究院会議において決定し、下記の3件の研究プロジェクトが採択されました。

同プロジェクトは、本学が世界に誇りうる最高水準の学術研究を、文系・理系分野を問わず集中的に推進し、画期的な成果を上げることを目指すものです。このため、高等研究院教員は、一定期間、研究プロジェクトの遂行に専念するとともに、本学の研究水準の全般的向上及び知的存在感を高める活動への貢献が期待されます。

今年度から、①公募する研究タイプを従来の4タイプから、研究タイプ1（世界最高水準プロジェクト研究）及び

研究タイプ2（萌芽的・独創的な若手プロジェクト研究）の2タイプに変更する、②自己推薦による応募方式を廃止し、部局推薦のみとする、③学内外の専門家による提案書査読体制の構築等、審査体制をより専門性の高いものにし、また、研究タイプ2の採択にあたっては、インターナショナル・アドバイザーボードの意見を参考にするなど、公募及び審査体制が大幅に変更されました。

なお、これまでに、44件の研究プロジェクトが採択され（平成14年度 15件、平成15年度 13件、平成16年度 11件、平成17年度 5件）、優れた研究成果を上げています。

「有機 π 電子系材料の新機能発現」

山口 茂弘 理学研究科教授

【研究タイプ】 2（萌芽的・独創的な若手プロジェクト研究）

【期 間】 平成18年4月1日～平成22年3月31日

【概 要】

炭素-炭素不飽和結合（ π 結合）が鎖状あるいは平面状につながった π 電子系化合物は、 π 電子の非局在化により特異な光・電子物性をもちます。これらは、有機EL素子や有機薄膜トランジスタなどに代表される有機エレクトロニクス分野で主役となる分子群です。本プロジェクトでは、 π 電子系骨格にケイ素やホウ素、リンなどの典型元素を組み込み、それら元素の特性を最大限に活かした独自の分子デザインにより、革新的な新材料の創出に挑戦します。特に、固体状態での発光、電荷輸送性といった物性に焦点をあて、それらの物性を極めることにより真に優れた材料の開発を目指します。

「温度可変超高压高分解能 NMR」

奥地 拓生 環境学研究科助手

【研究タイプ】 2（萌芽的・独創的な若手プロジェクト研究）

【期 間】 平成18年4月1日～平成23年3月31日

【概 要】

NMR（核磁気共鳴分光）は、多様な分子について、その未知なる構造と動きを高精度で調べることができる強力な手法です。分子性の物質は、その置かれた外場条件によって自在に性質を変化させますが、それは分子間相互作用の変化に起因する場合があります。そして分子間相互作用は、圧縮をすることで分子間の距離を縮めれば、必然的に大きく変わります。Gigapascal（約1万気圧）を単位とする超高压の領域では、このような理由による物質の性質の変化が頻繁に起こります。本研究では、 H_2O をはじめとする分子の高圧下での変幻自在の変化を、NMRという分子を調べる最終兵器ともいえる手法により捉え、何が起きているかを明らかにします。

「比較惑星学的視点の導入による固有磁場強度が地球周辺宇宙環境に与える影響に関する研究」

関 華奈子 太陽地球環境研究所助教授

【研究タイプ】 2（萌芽的・独創的な若手プロジェクト研究）

【期 間】 平成18年4月1日～平成21年3月31日

【概 要】

太陽系内の惑星は、太陽から吹き出す高速のプラズマ流（太陽風）に絶えずさらされており、この太陽風と惑星のもつ磁場、大気が複雑に相互作用することで、惑星周辺にはその星特有の宇宙環境が実現されています。現在の地球のように惑星が十分な強さの磁場を持つ場合には、磁場がバリアとして働くため、太陽風の殆どが方向を逸らされ、地球大気に直接吹きつけることはありません。一方で地球磁場は、これまでに長期変動を繰り返してきたことが知られており、大気進化や気候変動を論じる際の外部境界条件に影響を与えてきた可能性も指摘されています [e.g., Seki et al., Science, 2001; Ozima et al., Nature, 2005]。本研究では、この外部境界条件のうち、磁場の影響が無視できない大気散逸及び高エネルギー粒子生成過程の理解に向けて、地球磁場が弱まった時の宇宙環境の記述法の開発を目指しています。

卒業・修了留学生を送る夕べを開催

平成17年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べが、3月7日（火）、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この会は、今春卒業・修了（35か国、365名）して、本学を巣立っていく留学生の今後の活躍を激励、祝福し、相互理解と交流を深め、本学での思い出の一つとなるように



謝辞を述べるキロワスベトライノワさん

開催されたもので、留学生や愛知県をはじめとする留学生支援団体、留学生関係職員など約240名が参加しました。

最初に、平野総長から激励、祝福のあいさつがあった後、本学留学生後援会からの記念品が、総長から各学部の代表者へ手渡されました。また、来賓を代表して、柘植名古屋栄ライオンズクラブ会長から祝辞があり、これを受け、卒業・修了留学生を代表して、大学院文学研究科博士課程後期課程3年のキロワ スベトライノワさん（ブルガリア）、大学院国際開発研究科博士課程前期課程2年のブルム ビラクさん（カンボジア）が、日本に留学してからの感想を含めた謝辞を述べました。続いて、山本理事（研究・国際交流担当）の発声により乾杯が行われ、終始なごやかな雰囲気懇談がもたれました。江崎留学生センター長による閉会のあいさつの後、留学生に留学生後援会及び留学生支援団体からの記念品等が留学生に手渡され、盛況のうちに閉会しました。

安全衛生管理講習会を開催

安全衛生管理講習会が、3月20日（月）、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この講習会は、法人化後2年が経過し、労働安全衛生業務を再確認するとともに、衛生管理者の資質向上を図ることを目的として開催されたものです。

講習会では、山田誠二松下産業衛生科学センター所長に



講習会の様子

よる「企業体としての大学における安全衛生の課題」と題する講演が行われ、企業が労働衛生分野で求められている労働安全衛生法等の法の遵法、事業者の安全衛生配慮義務及び企業の社会的責任についての具体的な説明や、損害賠償請求事例の紹介、企業側からの大学に対する厳しい注文・提言がありました。続いて、中村総長補佐（労働安全担当）から、学内の安全衛生管理体制について説明があり、安全衛生業務の理解を深める有意義な講習会となりました。

シマウマが縞を持つ理由

近藤 滋 大学院理学研究科教授／高等研究院教授

動物園に行った子供が一番多く尋ねる質問は、「シマウマはどうして縞模様なの？」ということらしい。これは簡単なようで、意外にむずかしい問題である。あの縞模様は、どう見ても肉食の動物に見つかりやすそうで、生存に不利に思えるからだ。よく聞く説明は、「シマウマがたくさん集まっていると、縞と縞が重なり合い、群れが一匹の巨大な動物のように見えるためライオンも襲うことが出来ない」というものであるが、これはどう考えても怪しい。ライオンはそんなにバカだろうか？ TV でよく見る自然番組では、躊躇なく飛び掛っているようにしか見えない。それに、そんなに縞を持つのが有利なら、なぜ他の草食動物は

縞を持っていないのか？馬の類にしたって、縞を持っているのはシマウマだけなのだ。

「なぜ？」ではなく、「どうやって？」という問に変えても、この問題はますます厄介になるばかりだ。誰かがペンキで書いたわけではないから、縞は皮膚の上に自然に出来上がってくるわけである。縞の黒い部分には黒色素細胞があり、黒色素を産生している。「どうやってその色素細胞が縞状に並ぶのか」が、この問の核心ということになる。しかし、細胞の大きさは、大きくても0.1mm以下で、縞の幅と比べれば極めて小さい。細胞にとっては巨大なマスゲームをやっているようなもので、模様のどこに居るのかを自分で判断

Turning波の形成（シミュレーション）

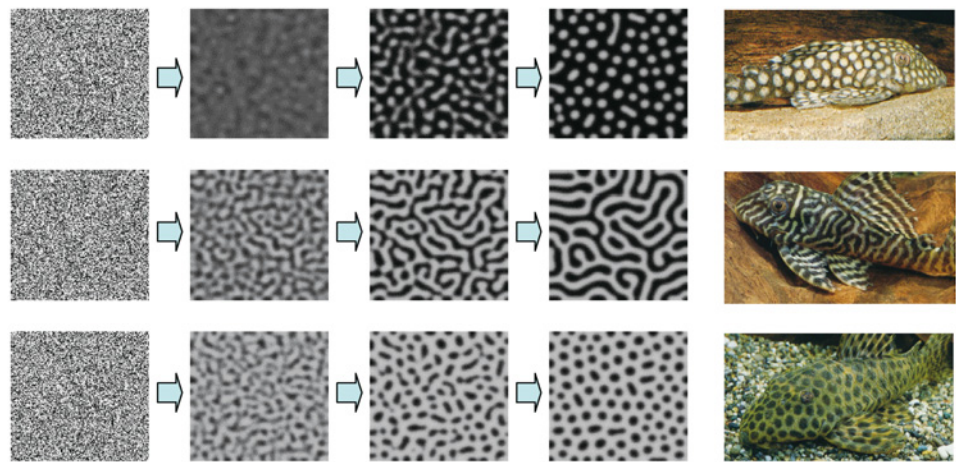


図1

することは、ちょっと出来そうもない。しかし、どこに基準になる位置情報があるだろうか？皮膚の内部には、シマウマの縞と似たような構造は一切無いのである。つまり指令を出してくれる監督者が居ないのである。

この問題は、「細胞集団は、どうすれば何にも頼らずに空間的な位置情報を作り出せるか？」という一般的な問題に拡張できる。一見不可能そうに見えるが、実は理論的には不可能でない。細胞間に2種類以上の分子による相互作用が働き、それが特定の条件を満たすと細胞集団の中にある種の波が発生する。この原理は「Turingの反応拡散原理」と呼ばれており計算機シミュレーションを行うと、シマウマだけでなく、キリン、ヒョウ、熱帯魚などありとあらゆる動物の模様が自然に発生してくる。(図1)

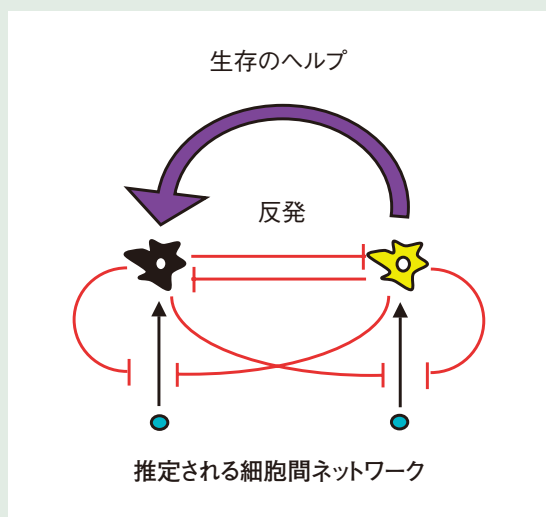


図2

Turing波には、面白い特徴がある。たとえば、壊しても勝手に元通りに直ってしまうのである。これは、魔法のように見えるが、Turing波が「波」であることを思えば不思議ではない。砂丘に出来る風紋は、自然に出来上がり、壊しても直ぐに再生してしまうのと同じである。この波の正体は、長らく謎のままであったが、我々の研究室でゼブラフィッシュを使って実証することに成功している。ゼブラフィッシュでは2種類(黄色・黒)の色素細胞のモザイクが縞を作っているのだが、この細胞間の相互作用が、Turingの理論で示された条件を満たしているのだ。(図2)

これで、「どうやって」模様を持つかは片づいた。では「なぜ？」の方はどうだろう。縞模様を作る細胞間ネットワークの中のひとつの反応の強さを変えると、このネットワークは2種類の色素細胞がちょうど良く交じり合った均一な「中間色」を作ることがわかった。均一な中間色。つまりシマウマ以外の全ての草食動物の皮膚と同じである。要するに、シマウマの縞を作っている原理は新たに作り出されたのではなく、他の草食動物が均一な中間色を持つための原理が変化したものである可能性が高い。シマウマは「縞を得た」のではなく、「均一色を失った」だけなのである。たまたま、目立つことがそれほど決定的に不利でないために、生き残ってしまったということなのだろう。意外な結論だが、シマウマは好きであんな模様をしているわけではなかったのである。

1959年生まれ。1982年東京大学理学部生物化学科卒業、1988年京都大学大学院医学研究科博士課程修了、博士号取得。東京大学医学部、スイスパーゼル大学で日本学術振興会特別研究員の後、京都大学医学部講師等を経て、1997年徳島大学総合科学部教授。2002年理化学研究所発生・再生科学総合研究センター位置情報研究チームチームリーダー。2003年より名古屋大学大学院理学研究科教授。2004年より名古屋大学高等研究院教授を兼任。1997年ベックマン奨励賞受賞。
 モットー：科学はエンタテインメント
 ひとこと：遺伝子が解っても、生物学は終わりません。
 趣味：魚を飼う、見る、食べる、研究する。

こんどう しげる



自由の構造と分類

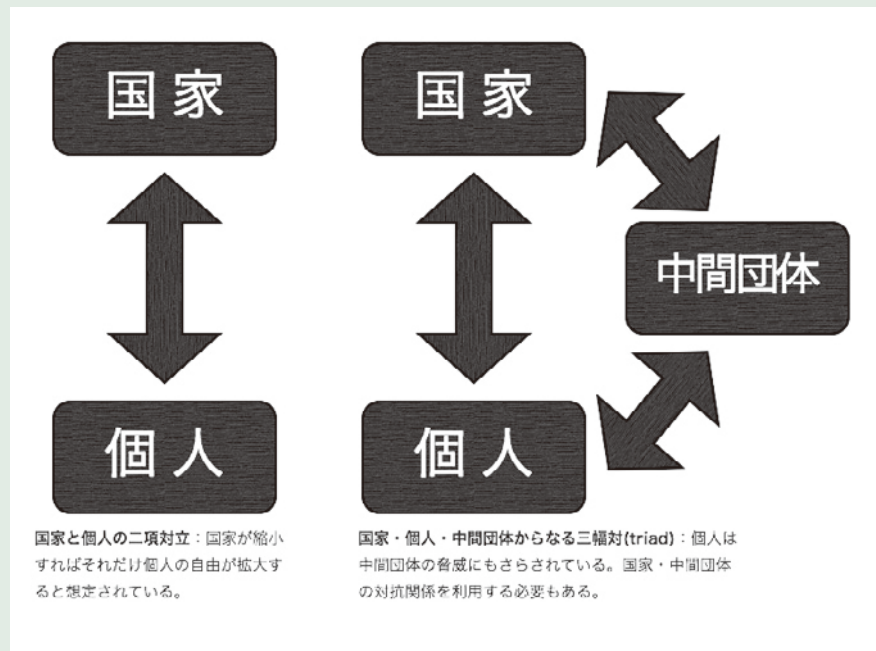
大屋 雄裕 大学院法学研究科助教授

「自由」という言葉を、私たちは日常的によく使っています。「自由に履修できる」あるいは「表現の自由」といったように。しかし、そこで問題とされている「自由」とは一つの同じものを示しているのでしょうか。

イギリスで活躍した政治思想史家のアイザイア・バーリンは、自由の中に二つの異なるタイプを見いだしました。それが、行動に対する制約のないことを意味する「消極的自由」と、自己実現など何かを成し遂げるための資源・可能性を持つ「積

極的自由」です。この分類は、「からの自由」「への自由」という表現でもよく知られているでしょう。バーリン自身は、例えば民族の自律・自治を追求するような際に積極的自由が独自の意義を持ち得ることを認めつつ、しかしそれが暴走する危険性を秘めているために、「自由」の中心は消極的自由であると解しました。

しかし問題は第一に、この両者がそれほどはっきりとは分離できないことです。たとえば「表現の自由」というとき、何を出版しても罰を受ける



ことはないものの（消極的自由の保障）、紙とインクの割当を受けるためには国家のチェックを受けなくてはならない（積極的自由の不在）としたらどうでしょう。あるいは、あらゆる行為が許されているものの明日食べるパンがない、という場合を想定してもいいかもしれません。消極的自由の実現のためには、最低限の積極的自由が必要になります。

あるいは、行為の限界への意識という問題もあります。バーリンは、自然条件による制約を自由の侵害とは考えませんでした。それが「仕方のないこと」であり、「したいけれどもできない」という意識をもたらさないからです。確かに、私たちが空を飛べないことを自由の欠如と考えるのには違和感があります。しかし、たとえばホームドアが地下鉄に設置されることによって、私たちはそうと気付かないうちに飛び込み自殺の自由を失っているでしょう。私はそれが悪いことだとは思いませんが、しかし私たちが自分の振る舞いを考える空間の在り方自体が操作され、気付かないうちに行為の可能性があらかじめ失われているという意味において、それはその上で寝られないように地下街に設置されたホームレスよけの奇妙な突起物と同じものなのです。

古典的な自由論では、自由の他者による制約、従わされる者が気付くような制約が問題になっていました。これに対し現代では、私たちの暮らす行為可能性の空間が操作され、私たちの自由はあらかじめ失われています。しかもその主体は国家に限られません。たとえば街頭の監視カメラの設置者のほとんどは国家ではなく、商店街や個々の商店・企業のような私人です。むしろ国家は、私人による行きすぎた監視を食い止めるための「プライバシー権」を支える主体として、自由を拡大する存在として機能することさえあるでしょう。

ここで登場しているのが、国家と個人のあいだにいてその両者と対立する可能性を秘めた「中間団体」です。考えてみれば、日本社会では常に地域共同体や企業といった中間団体が強すぎるのが問題となっていたのでした。だとすれば自由を考えるにあたって、国家を制約すれば個人の自由が拡大する式の単純な二項対立図式によるのではなく、それら中間団体を押さえ込むために国家を活用する方法を考えることが必要となってくるのではないのでしょうか。我々の自由を作り出す新しい理解の図式と、新しい自由のとらえ方が、いま求められているのです。

1974年生まれ。1997年東京大学法学部第二類（公法コース）卒業。東京大学大学院法政学政治学研究科助手（法哲学専攻）を経て、2001年より現職。2005年「規則とその意味：法解釈の性質に関する基礎理論」により日本法哲学会奨励賞（2004年論文部門）を受賞。論文に「情報化社会における自由の命運」（『思想』2004年9月号、岩波書店）、「他者は我々の暴力的な配慮により存在する」（『RATIO 01』講談社）がある。

おおや たけひろ



西澤 典彦
大学院工学研究科助教授

高機能超短パルス光源の開発と応用 —超短パルス光を自由に操ろう—

近年、レーザー技術の進展に伴って、超短パルスレーザーが実用化されてきました。最近では、10fs（フェムト秒、 10^{-15} 秒）以下の極短パルス光を出力するレーザーが市販されています。このような微少な単位は、光以外の分野ではほとんどお目にかかることはありません。

超短パルス光を用いると、今まで見ることでできなかった超高速な物理・化学現象を観測することができます。最近のノーベル化学賞（99）や物理学賞（05）が、超短パルスレーザーを用いた研究に授与されているのも、この光源のインパクトを示すものであると言えるでしょう。

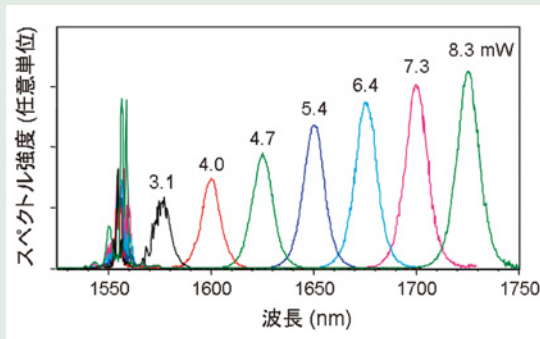


図1 波長可変超短パルス光源の光スペクトルの変化の様子。光強度を変化させることで、連続に広帯域に中心波長をシフトさせることができる。

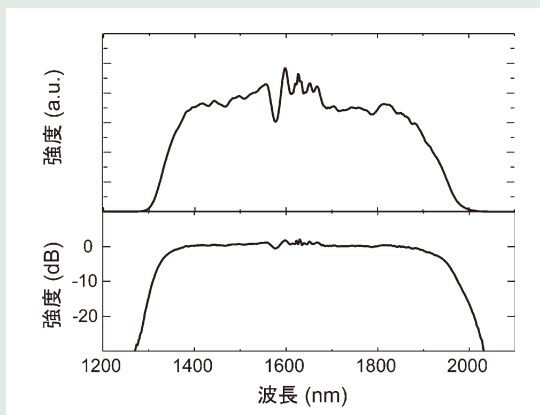


図2 約1～2μmまで広がる超広帯域スーパーコンティニューム光のスペクトル。上図は線形表示、下図は対数表示。

私の研究は、新しい高機能な超短パルス光源の開発とその応用に関する研究です。光源としては、全てが光ファイバで構成される超短パルスファイバレーザーを開発しています。ファイバレーザーは、安定性・コンパクト性に優れており、非常に実用的なレーザーです。将来的には、計測器や加工器の内部に取り込むことができると思います。

又、光ファイバを用いると、微少な断面内に長距離に渡って光を閉じこめることができるため、大きな非線形光学効果を得ることができます。私は、光ファイバと超短パルス光を用いて、超高速な非線形光学現象の解析をして来ました。これまでに、いくつかの新しい現象を見だし、それを用いて、1～2μmまで波長をシフトさせることのできる波長可変超短パルス光源や、連続に超広帯域に広がる、スーパーコンティニューム光といった新しい光源の開発に成功してきました。この波長帯において、実用的な超短パルス光源はこれまでになく、学会などでも大いに評価して頂いております。又、共同研究をしている企業が製品化に成功し、現在、研究機関などで活用され始めています。

これらの光源は、特に光計測の分野で有用です。現在は、最近医工学の分野で注目を集めており、眼底の観測などに用いられる光断層計測（OCT）や、加工業でニーズの高い3次元光計測などの分野への展開を図っています。又、分光計測などにも非常に有用であると言えます。この記事を読んで下さっている他学部の研究者の方々にも、是非ご活用頂ければ幸いです。

我々の研究にご興味のある方は、<http://www.nuee.nagoya-u.ac.jp/labs/optlab/> をご参照下さい。

山歩き

総合保健体育科学センター長
島岡 清



11月の大日ヶ岳頂上にて

私にとっては山歩きが趣味である。学生時代に登山を始めたことが、エンジニアになるつもりで大学に入った自分の人生を大きく変えたのだが、そのいきさつは、10年ほど前に学生相談室報に書かせていただいた。30代前半までは冬山や岩登りといった本格的な登山を行っていたが、今は山歩きと呼んだ方がふさわしい登り方をしている。以前から、リタイアしたら山の近くに住みたいと考えていたところ、いくつかの偶然と出会いがあっ

て、予定より早く、2年半前に奥美濃・ひるがの高原の大日ヶ岳（1709m）登山口にささやかな山荘を建てた。そのこともあって、目の前の大日ヶ岳に全ての月に登ること、頂上からスキーで滑り降りること、周辺の地味な山々を登ることの3つを当面の目標としている。一昨年12月には、福井県の山岳グループと大日ヶ岳山頂で知り合い、後日、彼らが出版した「福井の雪山」という立派な本を送っていただいた。また、現地で自然保護にあたっている人達とも知り合うことができ、昨年、ひるがの高原で「トレッキング」の授業を行う際に、大変お世話になった。これからも、現地ならではの予期せぬ出会いがありそうなので、楽しみにしている。大日ヶ岳には、3月から12月まではほとんど登ったのだが、1、2月の登頂と、頂上からのスキー滑降が最後まで残りそうである。技術を必要とする山ではないが、深雪をラッセルする強靱な体力が必要なので、単独では無理かも知れない。名古屋の自宅の押入れで眠っていた昔の山道具と、目標達成のために購入した新しい山道具を山荘の壁から吊るし、行く度に目に触れるようにしてモチベーションを高めているが、実際には、本務と親の介護問題等で、目標を達成するための時間が取れないことが目下の悩みである。当分は、山道具の前で好きな音楽を聞き、ビールを飲みながら、周辺の地形図と「飛驒の山山」（酒井昭市）といったマニアックな山岳研究書を読んで、つかの間の仮想登山を楽しもうと思っている。



（首を長くして）出番を待っている山道具たち

国際開発分野における自立的な研究能力の育成

ーフィールドワーク能力強化を中心にー

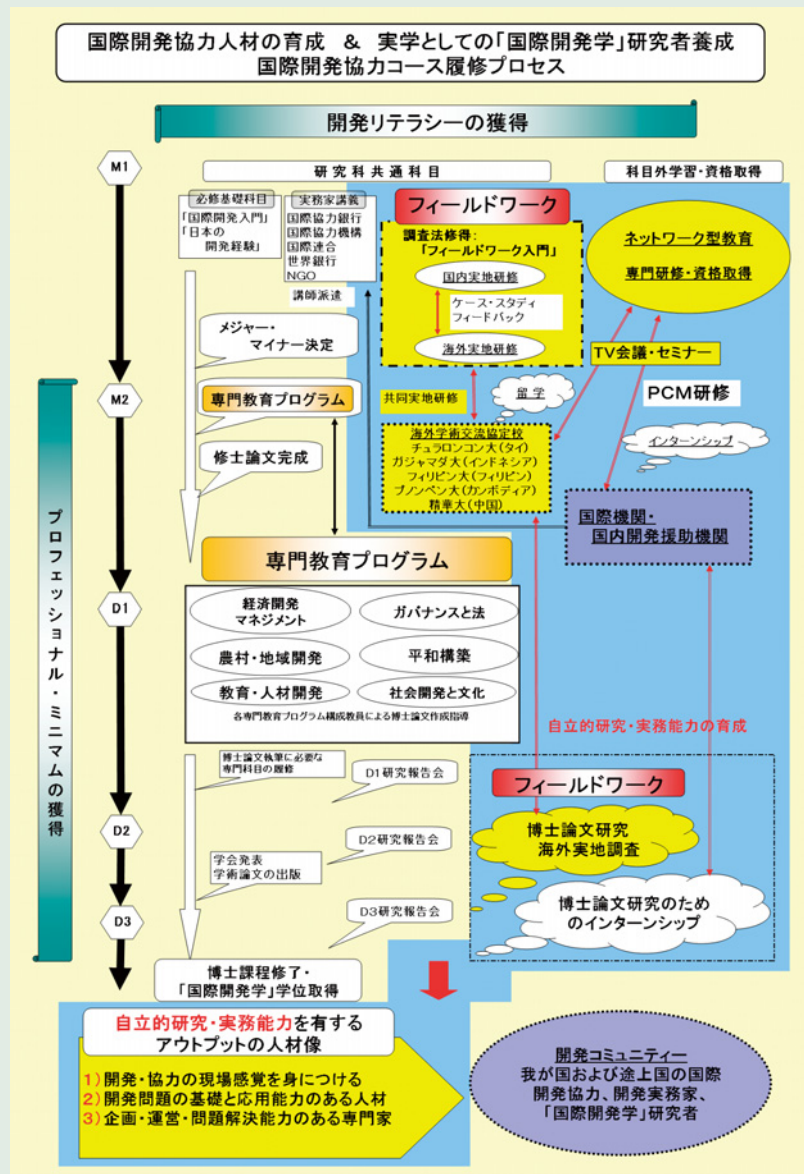
廣里 恭史 大学院国際開発研究科教授

大橋 厚子 大学院国際開発研究科教授

名古屋大学大学院国際開発研究科・国際開発専攻および国際協力専攻は、文部科学省の平成17年度「魅力ある大学院教育イニシアティブ」に「国際開発分野における自立的な研究能力の育成ーフィールドワーク能力強化を中心にー」を課題として応募し、採択されました。

国際開発研究科では、平成15年度から修士課程を中心としたカリキュラム改革に取組み、平成18

年度より国際開発協力コース（国際開発専攻および国際協力専攻）をスタートさせました。このコースの目標は、世界人口の8割以上をかかえる発展途上国の開発課題に関する問題解決能力を持った人材を、大学・研究所や開発機関はもちろん、社会の幅広い分野に送り出すことにあります。このため教育は、開発途上国における種々の開発課題と国際開発協力の実態とを正確に把握する能力



〔開発リテラシー〕および一つの専門分野について問題解決に寄与し得る能力〔プロフェッショナル・ミニマム〕との2つの力を養成する「T字型教育」を基本とします。

「開発リテラシー」の養成は「T字型教育」の横線であり、①学際的な開発学（Development Studies）の基礎を学ぶ科目、②欧米の発展をモデルとした開発理論の相対化をめざすために、日本の開発経験を理解する科目、そして③海外・国内実地研修科目群によって担われます。大学院学生はこれらの科目を履修することによって、多様な要素が絡まりあっている開発の実態の理解分析方法を学びます。

「プロフェッショナル・ミニマム」の養成は「T字型教育」の縦線であり、6つの専門プログラムすなわち「経済開発政策と開発マネジメント」、「農村・地域開発マネジメント」、「教育・人材開発」、「ガバナンスと法」、「平和構築」、そして「社会開発と文化」が担当します。学生はこれらのプログラムに属してプログラム科目を履修し、修士論文を作成することで専門性を深めます。

今回採択された「イニシアティブ」は、「開発リテラシー」の中の実地研修科目群の統合と充実を目指すものです。国際開発研究科では、実践教育重視の理念のもとに、10数年に渡って海外・国内実地研修を正規科目として実施してきました。これは途上国の開発現場を早期に触れることが大学院学生にとって大変重要であるためです。国際開発協力分野の創造性は、開発現場の実情に触れ、問題点の把握とその解決策を見出すことで養成さ

れます。さらにこの分野では、グループによる調査企画能力、途上国や国内の行政官・知識人・有力者との人間関係構築・議論の能力、そして調査グループの運営・調整能力が求められるのです。

今回の「イニシアティブ」では、この実地研修を、大学院学生にとってより学習効果の高い科目群とするとともに、国際貢献と地域貢献を果たせる内容へと改編する予定です。第1に「海外実地研修」と「国内実地研修」とを融合させて重複部分を整理するとともに、途上国の開発問題解決の努力と日本の開発経験との比較から得られた所見を、それぞれの調査地に相互にフィードバックできるように再編します。第2に実地研修の事前学習、現地調査、報告書作成の各段階にTV会議システムを利用します。第3に従来の実地研修成果をデータベース化して実地研修事前学習で利用し、学術交流協定校などへ情報提供の準備を行います。そして第4に、実地研修履修生を研修の運営に、そして博士後期課程学生を助言者として研修に参加させ、プロジェクト管理能力育成および教育能力開発の制度化を開始します。これは本研究科の次の課題である博士課程後期のカリキュラム改革へとつながります。

このような「イニシアティブ」に関わる作業のために公募によって矢倉研二郎特任講師を採用しましたが、外部者の目を持つ研究者との共同作業のメリットを実感しています。開発系大学院の正規課程における海外実地研修実施は、国際的に見ても本研究科の独創だと思いますので、世界に誇れるものに育てて行きたいと思っています。

1987年ピッツバーグ大学教育学大学院博士課程修了（Ph.D取得）。世界銀行特別任務官、アジア開発銀行ヤング・プロフェッショナル、チュラロンコン大学経済学部研究フェロー、名古屋大学大学院国際開発研究科助教授、アジア開発銀行上席教育専門官を経て、2004年より現職。「国際開発分野における自立的な研究能力の育成」の責任者。専門は国際教育開発論。

ひろさと やすし



1989年東京大学大学院人文科学部研究科単位取得退学。1998年名古屋大学大学院国際開発研究科助教授、2005年より現職。「国際開発分野における自立的な研究能力の育成」の副責任者。専門は東南アジア開発史。

おおはし あつこ



アジア・アフリカ学術基盤形成事業

地域特性にもとづく熱帯アジア臨海域の自然災害軽減に関わる研究連携

海津 正倫（うみつ まさとも） 大学院環境学研究科教授

現在、東南アジアや南アジアの三角州や海岸平野などでは、さまざまな自然災害や海面上昇の影響などが大きな問題としてクローズアップされていて、これらの解消に向けてのさまざまな努力が期待されています。平成18年度アジア・アフリカ学術基盤形成事業として採択されたこのプロジェクトは、著しい地域変容を示しているものの十分にインフラの整備が進んでいない熱帯アジアの臨海域を対象として、自然災害の被害軽減や温暖化によって懸念されている海面上昇の影響を軽減するために、対象国・地域との連携のもとにそれぞれの地域特性を考慮しながら、軽減の方策を導こうとするものです。

これらの地域では古くから稲作が行われ、人口密度が高いにもかかわらず、十分なインフラ整備のないまま多くの問題をかかえている場所も多く見られます。とくに、そのような場所では水害、高潮災害、海面上昇や、さらに津波の被害などさまざまな課題があり、これらの軽減を図るためには、地域の自然や社会条件をしっかりと見据えた

対応策の検討が必要です。そのためには、現地研究者との連携はもとより、若手研究者の育成をも視野に入れ、文理融合の視点をもって適切な方策を探ることが重要であり、日本で培われた経験・技術等の蓄積を共有することが望まれます。

このプロジェクトでは、それぞれの国における海岸・臨海域の地域特性をふまえた、自然災害や海面上昇の影響軽減のためのより効果的な対応策を導くことを目的として、南山大学、鳥取大学の研究者の協力を得ながら、名古屋大学が主導的に事業を進め、対象地域に関わる当該研究機関との連携事業を推進しようと考えています。その遂行にあたっては、テーマに関わる研究水準の向上はもとより、人々の生活と直接関わる課題をテーマとすることから、文理融合の視点をもって研究をすすめ、現地報告会の開催など研究成果の社会への還元をも積極的に進めるよう努力します。

また、本プロジェクトでは、現地研究者との共同のもとに地域調査を行い、課題の解明を進める予定で、研究における若手人材の育成に大いに貢



津波の被害を受けたインドネシア国バンダアチェ臨海地域
(2005年8月海津撮影)



タイ国バンコク市郊外の海岸侵食によって海上に残された電柱
(1999年12月海津撮影)

献できるものと思われます。さらに、地理情報システム（GIS）や衛星画像解析など、今後途上国でも大いに利用されなければならない地域情報把握のための技術に関する講習会なども計画していて、若手人材育成のための基礎的知識・技術の支援という点でも大いに期待できます。

本プロジェクトでは、2004年のインド洋津波災害によって著しい被害を受けたインドネシア国バンダアチュ、タイ国アンダマン海沿岸地域、サイクロンによる高潮災害やそれに伴う著しい海岸侵食の影響を受けているバングラデシュ沿岸地域、きわめて低平な土地条件のもとに海面上昇の深刻な影響が懸念されるメコンデルタなどを対象地域として、それぞれの地域における拠点大学や研究機関と緊密な連携を図って事業をすすめます。

研究協力機関の一つであるタイ国のチュラロンコン大学と名古屋大学とは大学間学術交流協定を結んでおり、インドネシアのジャクアラ大学理学部と名古屋大学大学院環境学研究科とは学部間協定を結んでいます。また、拠点校の一つであるタ

イのプリンス・オブ・ソンクラ大学や、ベトナム国立科学技術センター地理副研究所、タイ国土開発局（LDD）は既に行われた当該プロジェクトと関わる研究活動で大学院環境学研究科と研究協力の覚え書きを取り交わしていて、すでに研究交流の実績があり、今後交流を深めることにより、研究交流の基盤を支える拠点として大いに期待できます。

さらに、名古屋大学は高等教育の発展のためにグローバルなレベルでの相互協力を一層促進し、国際社会や地域社会に貢献するために国際学術コンソーシアム（Academic Consortium; AC21）を設立していて、AC21は目下その構成研究機関を拡大中です。本事業の協力校の一つであるタイのチュラロンコン大学もそのメンバーになっており、これらの実績をふまえながら、本事業終了後においても多くの機関と実践的な研究継続を実施することが期待でき、さらなる研究交流を継続することが可能であると考えています。



水面すれすれの土地で生活するベトナム国メコンデルタの農村地域
(2000年12月海津撮影)



サイクロンによる高潮で侵食されたバングラデシュの海岸線
(1991年5月海津撮影)

平成17年度名古屋大学総長顕彰

7名2団体表彰

平成17年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月27日(月)午後4時より、豊田講堂第1会議室において行われ、7名の学生と2団体が表彰されました。

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人物像を实践している学生を称えるために、平成15年度に創設されたもので、「学修への取り組み」(学修において成果がともなう取り組みを積極的に行っており、その姿勢・成果が他者の模範となると認められるもの等)と、「正課外活動への取り組み」(正課外の諸活動においてすぐれた評価を受けたもの、又は本学の名誉を著しく高めたもの等)の2部門からなります。

今年度は、総長、理事等で構成する総長顕彰委



員会での審査の結果、「学修への取り組み」部門で5名、「正課外活動への取り組み」部門で2名、2団体が受賞しました。各受賞者及び団体のことは、トピックス156号で紹介する予定です。

学修への取り組み

氏名	所属・学年	受賞理由
増本 理絵	文学部 人文学科4年	一年次から着実に前進させて来た研究態度は、歴代の卒業論文の中でも突出した内容として反映されている。また、その研究態度は、堅実かつ緻密、結論に至る経過も明瞭で力強く、他の学生への模範であり、研究者としての将来に大いに期待できる。
内海 真衣	教育学部 人間発達科学科3年	障害者援助への強い関心と意欲をもって心理学を学び、その成果を活かしたボランティアサークル「ちくさ日曜学校」の運営代表としての活動が、学修への相乗的好循環を実現し、またその姿勢が教育学部でのリーダー的役割を果たしている。
瀬海 美穂	理学部 生命理学科4年	2年次、3年次ではセミナーのリーダーとして、また実習においても積極的な取り組みは他の学生の模範であった。4年次では、マンチェスター大学との交換留学生として優れた成果を上げ、その交流に大いに貢献した。
野坂 宜之	医学部 医学科6年	医学部が実施する学術交流協定校への派遣制度により、ペンシルバニア大学への臨床実習で貴重な経験と大きな感銘を受け、帰国後その経験を学内外の機関誌に投稿し、医学部の派遣制度のアピールと米国実際の医療現場の紹介を積極的に行ってきた。また、基礎セミナーでの研究は2003年度医学部優秀研究・最優秀賞を受賞、その後も研究を続け米国留学時には、第105回アメリカ微生物学会総会でポスター発表を行うなど、学習意欲に富み、積極的に学修への取り組みを行ってきた。
鈴木 翔也	工学部 物理工学科4年	何事にも積極的かつ真剣に取り組む姿勢は、優秀な成績としても表れている。また、研究面では新たなテーマに取り組み、既に一定の成果を上げているのは、自身の努力とセンスによるところが大きい。学業・研究において他の学生の模範としてのみならず、研究者としての資質も兼ね備えていると言える。

正課外活動への取り組み

分野	団体名	氏名	所属・学年	受賞理由
国際交流	SOLV (School of Law Volunteers)	石川 佳樹	法学部 法律政治学科2年	学生による法学部公認サークルとして、法学部の留学生と日本人学生との交流をはじめ留学生受入時のサポート等支援を目的とした様々な活動や外部への情報発信を行ってきた。
国際交流		馬 翔	大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 博士課程前期課程2年	社会の改善に貢献するという信念をもち、名古屋地域中国留学生学友会会長、生協理事会の留学生ネットワーク幹事会副代表を歴任し、中国留学生の支援や、周辺地域の各友好団体と連携し様々な交流イベントを実施し、中国と日本の架け橋として、両国の友好を促進に取り組んでいる。
正課外研究活動	名古屋大学フォーミュラチーム FEM	秋山 友彦	工学部 物理工学科4年	平成15年10月発足後、全日本学生フォーミュラ大会へ参戦し、第2回大会参加大学34校中第12位、第3回大会では45校中第9位と健闘。活動には「将来社会で活躍するために自己を磨き、高める場」「大学で学修したことを実践的に試行できる場」であると、その意義を見出している。
正課外研究活動		内藤 聖貴	大学院理学研究科 素粒子宇宙物理学専攻 博士課程後期課程2年	学部一年時から博士課程後期課程2年次の現在まで、8年間陸上競技部に在籍し、学業と競技者としての両立を続けるのみならず、東海学生陸上競技対抗選手権大会5000m・10000m優勝・大会新記録、東海秋季個人選手権5000m優勝、63年ぶりの優勝となった東海学生駅伝では区間賞を取るなど、優秀な成績を修めた。

公開シンポジウム「源氏・賢治・ジュリエット」を開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、3月4日（土）、文学研究科237講義室において、公開シンポジウム「源氏・賢治・ジュリエット」を一般市民など約200名の参加を得て開催しました。

このシンポジウムは、「文学リテラシーの相互関連」という趣旨の下、開催され、各講師がデシプリンとする研究理念を基礎に、通念として理解されている作品を新たな舞



会場からの質問に答える講師

台上に登場させることに主眼を置いて講演が行われました。

シンポジウムでは、司会の神尾美津雄同研究科教授による趣旨説明の後、高橋 亨同研究科教授が、「光源氏の罪と栄華」と題して、源氏物語の輻輳する構造を明らかにし、次いで、松澤和宏同研究科教授が、「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』について－死者とともに生きていく－」と題して、創作原稿をたどり賢治の彼岸と此岸の倫理観を展開し、また、滝川 陸同研究科教授が、「チャイルド・マリッジ考－『ロミオとジュリエット』－」と題して、作品の背後に潜む幼児婚姻の実態について報告しました。

続いて、中川久定京都大学名誉教授が、「フランス語が読めていなかったフランス文学の教授」と題して、特別講演を行い、2名のフランス文学者を例に挙げながら、異文化接触による理解の懸隔を凝視することで、自らの文化的差異が超克されると話しました。また、シンポジウムで意図的に避けた言語の差異が持つ文化の固有性という深刻な問題について、中川名誉教授がまとめ、盛会のうちに終了しました。

平成17年度教育学部附属学校卒業式を挙行

平成17年度名古屋大学教育学部附属学校卒業式が、3月1日（水）、豊田講堂において、若尾理事、豊田理事・事務局長、村上教育学部長、高味修一 PTA 会長を来賓に迎えて挙行されました。

式典では、開会にあたり、卒業生が作成した映像が流れ、附属中・高等学校の全在校生徒480名と教職員、保護者150



豊田附属学校長から卒業証書を受け取る卒業生

名が見守る中、卒業生114名が晴れやかな表情で入場しました。卒業生のプロフィール等が映し出される中、豊田附属学校長から、卒業生一人一人に卒業証書が手渡され、続いて、「学ぶ心を忘れるな！」と式辞が述べられました。次に、若尾理事から、自らの経験を例に挙げながら、「附属学校で培った個性と伸びやかさは、これから生かすことができる。」、村上学部長から、「附属学校は、居心地がいい、面白いというだけでなく、学び成長できる学校です。これからも成長を続けて欲しい。」と祝辞がありました。在校生の送辞に続いて、卒業生答辞があり、卒業生の3年間の思い出の映像が流された後、卒業生代表が一言ずつ自分たちの想いと感謝の気持ちを述べました。卒業生が作成した映像等が式典全体を明るい雰囲気にし、生徒が主体的に作り上げた温かみのある卒業式となりました。

国際シンポジウム「法実務技能教育の現状と将来」を開催



基調報告の様子

国際シンポジウム「法実務技能教育の現状と将来－模擬裁判、ロイヤリング教育はいかにあるべきか－」が、2月18日（土）、文系総合館カンファレンスホールにおいて開催されました。

このシンポジウムは、平成16年度から本学が中心となり12大学と連携して実施している法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム「実務技能教育教材共同開発共有プロジェクト」（事業推進責任者：菅原郁夫法学研究科教授）及び大学院法学研究科の主催により、我が国の法科大学院における実務技能教育の方法論、特に、司法研修所教育との関係を検討することを目的として開催されたもので、法科大学院教員や実務家など約70名が参加しました。

シンポジウムでは、佐分同研究科長による開会あいさつ、浅田和伸文部科学省高等教育局専門教育課長による来賓あいさつに続き、全米法律専門技能研修センター教授及びウ

イスコンシン大学ロースクール教授が、「アメリカにおける実務技能教育の実情」について基調報告し、同国における実務技能教育の方法論を紹介するとともに、法科大学院と実務家教育機関との在り方の違い、連携関係、分担関係について情報交換を行いました。また、司法研修所教官等が、「日本における実務技能教育」について基調報告し、我が国の司法研修所の状況及び法科大学院の実情を示しました。続いて、パネルディスカッションが、「日本における実務技能教育の在り方」をテーマに行われ、今後のあるべき教育方法論、司法研修所との協力体制の在り方等について活発な議論が交わされました。

同プロジェクトでは、今後、今回のシンポジウムでの問題提起とその検討を通じて、より目的意識の明確な質の高い教材の作成・共有を目指していくことにしています。



パネルディスカッションの様子



あいさつする浅田文部科学省高等教育局専門教育課長

国際シンポジウム「国際的民事訴訟の現状」を開催

●大学院法学研究科

大学院法学研究科は、2月18日（土）・19日（日）、国際シンポジウム「Current Topics of Transnational Civil Procedure」を開催しました。

このシンポジウムは、科学研究費補助金学術創成研究「国際的ビジネス紛争の法的解決の実効性を高めるための新たなフレームワークの構築」の一環として開催されたもので、名古屋大学インターナショナル・アドバイザーボード(国



シンポジウムの様子（1日目）

際諮問委員会）委員のシュトゥルナーフライブルク大学教授をはじめ、同研究プロジェクトの継続的協力者である海外の研究者も多く参加しました。

1日目は、名古屋市内のホテルで行われ、平野総長及び佐分同研究科長のあいさつに続き、研究代表者の河野正憲同研究科教授から、同プロジェクトの趣旨説明がありました。また、セッション1「国際的な差し止め保全処分」、セッション2「国際的クラスアクション」では、報告、コメント及び会場全体での議論が行われ、非常にアクチュアルなテーマを取り上げたこともあり、議論も活発で、通常伺い知ることの難しいアメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、フィンランド、ハンガリー等の情報も得られました。

2日目は、会場を名古屋国際センター別館ホールに移し、セッション3「外国での証拠収集」、セッション4「外国判決の失権効」が行われ、特に、セッション3では、時間が足りなくなるほど報告者と会場との間で活発な議論が交わされました。

なお、同シンポジウムの内容は、出版物にまとめ、日本とヨーロッパで情報発信していくとともに、今後も、同様のシンポジウムを定期的で開催していく予定です。

シンポジウム「社会の求める人材と大学院教育のあり方」及び経済学研究科懇談会を開催

大学院経済学研究科は、2月23日（木）、シンポジオンホールにおいて、シンポジウム「社会の求める人材と大学院教育のあり方」を開催しました。

シンポジウムでは、友杉同研究科長のあいさつの後、清水啓典一橋大学大学院商学研究科教授（元副学長）による「第3次産業革命と日本の大学院教育」と題する基調講



パネルディスカッションの様子

演が行われ、次いで、鍋島直樹同研究科教授及び吉田 猛同研究科助教授から、学部学生、社会人及び企業に対して行ったアンケートの結果について報告がありました。続いて行われたパネルディスカッションでは、荒山裕行同研究科教授の司会の下、下記のパネリストにより「社会の求める人材と大学院教育のあり方」について活発な議論が行われました。

また、シンポジウムに先立ち、大学院経済学研究科懇談会が、同研究科第1会議室において開催され、下記の懇談会委員から、同研究科の教育研究活動について貴重な意見が述べられました。

【懇談会委員・パネリスト】

公立学校共済組合理事長（元文部科学省高等教育局長）	工藤 智規
神戸大学大学院経営学研究科長	櫻井 久勝
一橋大学大学院商学研究科教授（元副学長）	清水 啓典
総務省総務審議官 政策研究大学院客員教授	堀江 正弘
名古屋大学理事（教育関係担当）・副総長	若尾 祐司

省エネ技術及び温暖化ガスの排出量取引演習を実施

●情報文化学部

情報文化学部は、2月23日（木）、同学部ワークステーション室において、有限責任中間法人名古屋環境取引所との連携交流の一環として、㈱日立製作所の協力を得て、省エネ技術及び温暖化ガスの排出量取引演習を実施しました。

この演習は、2008年から始まる京都議定書の第1約束期



演習の様子

間を控え、急務の課題となっている温暖化ガスの排出量データの算出と検証、温暖化ガスの排出量取引のノウハウを取得することを目的として実施されたもので、同学部の学生と企業の参加者がチームを組み、各々の模擬企業規模にあった省エネ技術の導入シミュレーション及び排出量取引シミュレーションを行いました。具体的には、技術取引市場から効率的な省エネ技術を購入・導入し、省エネを行って温暖化ガス排出権を獲得、その排出権を30台のパソコン上で作られたバーチャルな排出権取引市場で売買しました。株式市場さながらの緊張感と真剣さから、多くの学生や企業の参加者は、演習であることも忘れて熱中していました。

今回の演習は、学生にとって、地球環境を保全するための新しい社会システムについて考え、公正で公平な取引スキームや市場ルール作りについて学ぶとともに、情報システムの効果的な運用等に関する知識を深めるよい機会となりました。なお、演習の結果は、学会等を通じて社会に広く公表する予定です。

情報文化セミナー・シンポジウムⅡを開催

●情報文化学部

情報文化学部は、3月3日（金）、IB電子情報館において、情報文化セミナー・シンポジウムⅡ「文理融合型学部におけるアドミッション・ポリシーの課題と展望」を開催しました。

このシンポジウムは、文理融合型学部におけるよりよいアドミッション・ポリシーを考えるために開催されたもの

で、一般市民を含め、40名を超える参加がありました。

シンポジウムでは、文理融合型学部の側から、佐野同学部長による基調講演「名古屋大学情報文化学部の教育とアドミッション・ポリシー」や、山田文康静岡大学情報学部教授による「文系情報学科に対する志願者の特性」、森梅代名古屋文理大学情報文化学部長による「アドミッション・ポリシーと教育の課題－名古屋文理大学情報文化学部－」と題する講演がありました。続いて、高校等で受験生を送り出す側から、荒川基樹名古屋市立向陽高等学校教諭／進路指導主事による「アドミッション・ポリシーと教育目標」、松井悦夫河合塾教育研究開発本部長による「予備校からみる文理融合型学部」と題する講演があり、最後に、講演者に間野丈夫中日新聞編集局社会部次長を加えた6名によるディスカッションが、会場との意見交換を交えながら活発に行われるなど、充実したシンポジウムとなりました。



講演する佐野情報文化学部長

UFJ セントラルリース寄附講義「環境問題への挑戦」を開講 － 目録及び感謝状贈呈式－

●大学院環境学研究科



寄附講義の目録を贈呈する田中社長

大学院環境学研究科は、3月14日（火）、本部第2会議室において、4月よりUFJセントラルリース寄附講義を開講するに当たっての目録及び感謝状贈呈式を行いました。

同研究科は、過去3年にわたって、UFJ環境財団の寄附により同講義を実施してきましたが、継続してほしいとの受講者からの要望をうけて、本年度から、UFJセントラルリースより寄附を受け、新たな視点でスタートさせることになりました。

贈呈式には、UFJセントラルリースからは、田中一好代表取締役社長、百々 聡経営企画グループ長、本学からは、平野総長をはじめ、山下、若尾、豊田理事、林同研究

科副研究科長、実施担当責任者として、涌田幸宏同研究科助教授が列席しました。

はじめに、田中社長から目録が贈呈された後、平野総長から感謝状と記念品が贈呈され、御礼のあいさつが述べられました。その後、田中社長より、寄附講義の意義と環境教育のさらなる発展を期待したいとのあいさつがありました。贈呈式に引き続き、同会議室で記者会見が行われました。

本寄附講義の全体テーマは「人間社会と自然のバランスをいかに再構築するか」です。個々の環境問題の実態だけではなく、世界の人口の増加や自然観・倫理観の変遷など、環境問題の背後にある様々な問題について取り上げていくことにしています。また、より理解を深めるために、教室での講義だけではなく、実際に現地を訪れる視察旅行も企画されています。

本講義は、2年次の学部学生を対象とした全学教養科目として実施される授業ですが、愛知県内国公立大学の単位互換制度を活用して、他大学の学生も受講できるようになっています。また、一般市民に対しても開放され、学生と市民とが切磋琢磨して環境問題を学習する場にもなっています。さらに、なごや環境大学関連公開講座にもなっています。

本講義は、本格的な文理融合型の大学院として平成13年4月に名古屋大学に設置された環境学研究科が、その成果を社会に還元する意味もあって、実施主体となって行うものです。名古屋大学が環境問題に関する寄附講義を開講することにより、地域社会に対してより一層貢献できるものと期待されます。



あいさつする田中社長

公開レクチャー「映像の記憶／記憶の映像」を開催

－アート of the 驚きをサイエンスに繋ぐ－

●情報文化学部

情報文化学部は、2月28日（火）、IB 電子情報館において、大学院情報科学研究科及び大学院環境学研究科の共催を得て、公開レクチャー「映像の記憶／記憶の映像－情報文化教育におけるアートとサイエンス」を開催しました。

このレクチャーは、平成17年度総長裁量経費教育改革・改善プロジェクト「デジタル映像資料を使った新たな文理



公開レクチャーの様子

融合型教育創出のための調査研究」の一環として行われ、アーティスト、パフォーマー、学生の協働制作によるインターメディア・パフォーマンス作品「サイクリング」（昨年12月発表）のテーマである「記憶」、「映像」、「教育」等を学問の世界に投げかけたもので、平日にもかかわらず学内外から多くの参加がありました。

レクチャーは、安田孝美情報科学研究科教授による開会あいさつ及び身体表現（バレエ）のデジタルアーカイブ化研究の紹介で始まり、第1部では、川口 潤環境学研究科教授による記憶の認知科学的研究、唐沢かおり環境学研究科助教授による社会心理学教育における映像教育の重要性に関する講義が、第2部では、茂登山清文情報科学研究科助教授による「サイクリング」公演の経緯説明、アーティストの伏木 啓名古屋学芸大学助手の編集による「サイクリング」ビデオ版の上映が行われました。第3部では、藤木秀朗文学研究科助教授による映画における記憶の創造をテーマとした講義が行われ、佐野情報文化学部長のあいさつで閉会となりました。同時開催された情報文化学部生による新作の映像作品の展示とあわせ、新たな教育形態の可能性を垣間見るひとときとなりました。

シンポジウム「地球惑星科学を語ろう」を開催

シンポジウム「地球惑星科学を語ろう」が、3月3日（金）、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。

このシンポジウムは、藤井直之環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授の定年退職を記念して、有志により企画されたもので、全国から100名を超える参加がありました。



藤井教授を中心に活発に行われた質疑応答の様子

シンポジウムでは、本来総合科学であるはずの地球惑星科学が、学問の進歩とともに細分化が進み、互いの分野が見えなくなっているのではないかと反省に立ち、地球惑星科学の幅広い分野の現状を知り、将来の方向性を議論する趣旨で講演と質疑が行われました。8名の講演者から、地震学、火山学、測地学、岩石学、地球化学、惑星科学、非線形科学等の話題が提供され、大学教育における講座制の功罪まで議論されるなど、ユニークかつ興味深い内容となりました。また、終始和やかな雰囲気ながらも、予定時間を大幅に超過するほど活発な質疑応答が行われました。

最後に講演した藤井教授が参加者に向けて発した「あなたの視たい（学問上の）夢は何ですか」という問いには、地球惑星科学を今後魅力的な学問として発展させていく上での重大なヒントが含まれており、地球惑星科学の面白さと、夢を抱き熱意を持って学問に取り組むことの重要性を改めて認識させるシンポジウムとなりました。

国際シンポジウム「文理融合型エコシステム科学の展開」を開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所は、3月2日（木）、環境総合館レクチャーホールにおいて、国際シンポジウム「文理融合型エコシステム科学の展開－アジアから新たな学問の潮流を－」を開催しました。

同研究所では、平成17年度総長・所長裁量研究経費プロジェクト「文理融合型エコシステム科学の展開」において、



講演の様子

自然生態システムと社会経済システムとの両立を図るエコシステム科学に対する文理融合型の研究枠組みについて考究しています。このシンポジウムは、同プロジェクトの一環として、文理融合型エコシステム科学こそアジア発の新たな学問としての可能性があるのではないかと考えから企画されたもので、学内外から60余名の参加がありました。

シンポジウムでは、平野総長の開会あいさつの後、松井所長から、同研究所の文理融合学際研究について説明がありました。続いて、インドネシア技術評価応用庁のアドバイザー博士が住民参加型の地域開発計画について、韓国慶南大学校副総長が環境保護法及び環境－経済統合モデル分析について、薛進軍大分大学教授が経済発展と環境問題について、鷺田豊明上智大学教授が自然に対する全体論的な見方について、小野耕二法学研究科教授が政治学者の立場からの学際研究について、それぞれ講演しました。講演終了後には、松井所長と5名の講演者によるパネルディスカッションが、「アジアの環境と経済」をテーマに行われ、異なる専門分野ということもあり、活発な意見交換が交わされるなど、充実したシンポジウムとなりました。

エコトピア融合プロジェクト・シンポジウムを開催

●エコトピア科学研究所

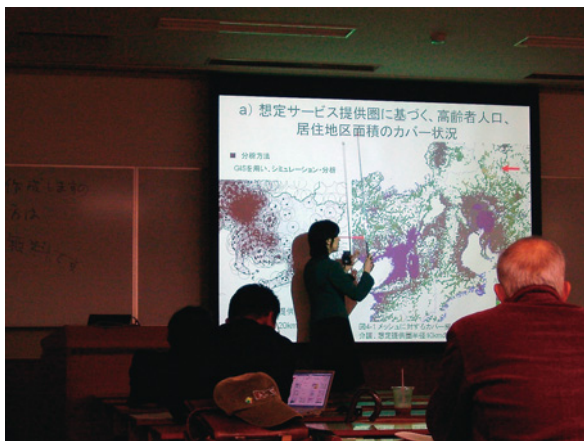
エコトピア科学研究所は、3月10日（金）、IB電子情報館において、エコトピア融合プロジェクト・シンポジウム「高齢社会に対応した人間支援技術に関する統合的研究」を開催しました。

このシンポジウムは、同研究所が注力している学内外の高齢者支援研究に関する文理融合・異分野融合の取り組み

を推進することを目的として開催されたものです。

シンポジウムでは、初めに、大日方先端技術共同研究センター長から趣旨説明があった後、機械工学、情報科学、心理学、建築学、健康・スポーツ科学、理学療法学、産学連携の各分野において、高齢者支援研究に携わっている本学の研究者が講演を行いました。在宅高齢者を支えるサービス拠点の地域配置（「街づくり」）といった巨視的な視点に立った研究紹介がある一方で、筋肥大のメカニズムを分子細胞レベルで解明する（「筋肉（体力）づくり」）といった微視的な視点に立った研究紹介もあるなど、高齢者支援研究について、多角的な視点から議論が行われ、文理融合・異分野融合と呼ぶにふさわしい講演会となりました。

同研究所では、今後も、こうした高齢者支援研究に関する文理融合・異分野融合を推進していくことにしています。



講演の様子

名古屋大学学術機関リポジトリ公開記念講演会を開催

●附属図書館

名古屋大学学術機関リポジトリ公開記念講演会が、3月9日（木）、中央図書館多目的室において開催されました。

このシンポジウムは、2月28日に名古屋大学学術機関リポジトリ（NAGOYA Repository）が一般公開されたことを記念して開催されたもので、学外からの19名を含む78名の参加があり、学術機関リポジトリに対する関心の高さを



講演する松原情報連携基盤センター助教授

伺わせました。

NAGOYA Repository は、本学が責任を持って、学内の研究者の電子的な教育・研究成果を網羅的に収集、蓄積、保存し、インターネットを通じて学内外に無償で公開することにより、本学の教育・研究成果を社会に還元し、学術研究及び社会に貢献するもので、日本で7番目、世界では635番目に公開されました。

講演会では、平野総長のあいさつの後、伊藤附属図書館長による「研究成果を大学から世界へ」、萩 誠一情報文化学部・情報科学研究科図書掛職員による「NAGOYA Repository と学術機関リポジトリ最前線」、松原茂樹情報連携基盤センター助教授による「学術情報流通と学術機関リポジトリ」と題する講演が行われ、参加者は熱心に耳を傾けていました。

アイソトープ総合センター防災訓練を実施

安全保障委員会及びアイソトープ総合センターは、3月3日（金）、同センターにおいて、千種消防署と共催で、防災総合訓練を実施しました。

この防災訓練は、震度6弱の地震に伴い、火災及び放射能汚染事故が発生したことを想定して、緊急連絡網による通報、119番通報、自衛消防隊による初期消火・避難誘導・

救出救護、放射線安全防护の訓練、消防隊による RI 施設での救助及び消火活動、消防隊と自衛消防隊との連携等について、総合的に訓練を行うことを目的として、はしご車、タンク車、救助車、化学車、救急車など計10台を使用して実施されたもので、消防隊員46名、見付消防団員5名を含む計105名が参加しました。

訓練では、放射性ヨウ素の水溶液が漏れ、実験室内が汚染されたとして、化学防護服（ドレーゲル）や防毒衣を着装した消防隊員が建物に突入して、負傷者を救出し、屋外階段からはバスケット・ストレッチャーで負傷者を運び出しました。また、屋上に逃げた人をはしご車で救出する訓練や一斉放水も行われ、訓練終了後には、千種消防署長及び前島安全保障委員長から講評がありました。

多数の見学者が見守る中で行われた今回の大規模な防災訓練は、職員や学生の防火・防災意識の高揚に役立つものとなりました。



防災訓練の様子

2006年国際戦略ワークショップを開催

●国際企画室

国際企画室は、2月16日（木）・17日（金）及び3月8日（水）・9日（木）の2回にわたり、2006年名古屋大学国際戦略ワークショップを開催しました。

このワークショップは、平成17年度文部科学省国際戦略本部強化事業に採択された名古屋大学国際交流協力推進本部構想の一環として、大学の国際化において先進的な海外



ワークショップの様子

の大学から戦略計画策定担当者を招へいし、本学の国際化推進計画について助言を得ることを目的に開催されたものです。

第1回では、本学全学同窓会上海支部幹事の王徳同済大学教授及び洪庚明上海财经大学法学院副院長を招き、山本理事（研究・国際交流担当）をはじめ本学の国際交流担当者とともに、中国における国際学術交流計画や、上海事務所を活用したネットワーク構築等について助言を得つつ、有益な意見交換を行いました。

第2回は、大学管理運営計画の先進的な策定システムを構築しているシドニー大学から、Judyth Sachs 副学長（学習・教育担当）を招いて行われ、本学が AC21加盟校との連携により実施する予定の「大学教育に関するベンチマーキング」について議論した後、シドニー大学戦略計画の策定過程の紹介、本学国際化推進プランの内容・策定プロセス等に関する幅広い助言を得ました。

なお、本学国際化推進プランは、国際交流協力推進本部ホームページ（<http://www.iech.provost.nagoya-u.ac.jp>）に掲載されています。

文学研究科「アートキッズ'06」を開催

大学院文学研究科は、3月28日（火）、文学部棟講義室において、「アートキッズ'06」（小学校3・4年生対象）を開催しました。

このプログラムは、木俣元一文学研究科教授の指導のもと、美術館などで将来仕事をしたいと希望する大学院生が主体となって行う、実践を通して鑑賞教育の可能性を探る



熱心に講義を聞く参加者

ことを目的とした大学院の授業の一環です。この授業では美術教育の現場で活躍する伊藤優子氏を講師として招き、実際の経験に即した指導も受けました。

今回は、モナリザをはじめとする名画の表情をキーワードにし、「子どもたちに絵をよく見てもらうこと」を目標に、美術に親しめるように配慮しながら、肖像画の知識を取り入れた講義とワークショップを行いました。参加した18名の小学3・4年生は、授業に聞き入り、工作に夢中になりました。

東海市の渡内小学校でも出張授業を行っており、今後も、このようなプログラムを通して、大学と地域の交流の場を広げていく予定です。

2. 3 高麗大学校副総長

Lee,Doo-Hee 高麗大学校副総長（国際交流担当）が訪問され、本学との学術交流推進に関する意見交換が行われるとともに、同大学校が中心となり3月29日から3月31日まで開催されたアジア・太平洋国際教育協会の年次総会及びワークショップへの本学関係者の招請がありました。



3. 2 中国国家行政学院法学部長等

応松年中国国家行政学院法学部長（中国法学会行政法学研究会会長、名古屋大学名誉博士）、馬懐徳中国政法大学法学部長、馬呈元同大学国際法学部長及び辛崇陽同大学助教授が訪問され、大学院法学研究科との学術交流の現状と今後の交流活動の推進について意見交換が行われました。



3.10 モンゴル外務省法務局長

BULGA, Altangerel モンゴル外務省法務局長（モンゴル国立大学学術評議会評議員）が訪問され、本学とモンゴル国立大学との学術交流推進及び日本とモンゴルとの国家単位での学術交流の将来構想等について意見交換が行われました。同氏は、平成17年度文部科学省「新世紀国際教育交流プロジェクト・行政官等受入事業」（大学院法学研究科が申請・招聘）により来学され、その際に表敬訪問されたものです。



3.14 ザグレブ大学総長

MENCER, Helena Jasna ザグレブ大学総長（クロアチア）が訪問され、国立大学法人化等の本学における大学改革の現状についての意見交換と、本学との学術交流協定締結の可能性を含めた交流促進等について懇談が行われました。



3.15 ビタウタス マグナス大学長等

KAMINSKAS, Vytautas ビタウタス マグナス大学長及び PRANEVICIUS, Liudvikas 同大学副学長（リトアニア）が訪問され、両大学の学術活動の現状等について意見交換が行われました。同学長等は、中部大学との学術交流協定締結のために来日され、その際に、この地区の拠点大学である本学を表敬訪問されたもので、表敬後も、それぞれの専門分野の研究室等（大学院工学研究科）を訪れ、本学教員と研究に関する懇談を行いました。



新任役員等の紹介

●理事（総務・企画関係担当）・副総長



大峯 巖
(おおみね いわお)
専門分野：理論化学

〈略歴〉
昭和55年4月 マサチューセッツ工科大学研究助手
昭和56年6月 慶應義塾大学助手（理工学部）
昭和57年12月 岡崎国立共同研究機構助教授（分子科学研究所）
平成6年4月 名古屋大学教授（理学部）
平成8年4月 名古屋大学教授（大学院理学研究科）
平成15年1月 名古屋大学大学院理学研究科長・理学部長
（～平成17年12月31日）
平成18年4月 名古屋大学理事（総務・企画関係担当）・副総長
（～平成20年3月31日）

●理事（人事・労務関係担当）・副総長



佐分 晴夫
(さぶり はるお)
専門分野：国際法学、国際経済法学

〈略歴〉
昭和50年4月 名古屋大学助手（法学部）
昭和53年4月 名古屋大学助教授（法学部）
昭和59年4月 金沢大学助教授（法学部）
昭和62年4月 金沢大学教授（法学部）
平成4年4月 名古屋大学教授（法学部）
平成11年4月 名古屋大学教授（大学院法学研究科）
平成16年4月 名古屋大学大学院法学研究科長・法学部長
（～平成18年3月31日）
平成18年4月 名古屋大学理事（人事・労務関係担当）・副総長
（～平成20年3月31日）

●理事（教育関係担当）・副総長



杉山 寛行
(すぎやま ひろゆき)
専門分野：中国文学、中国思想史学

〈略歴〉
昭和55年4月 名古屋大学講師（文学部）
平成3年4月 名古屋大学助教授（文学部）
平成9年2月 名古屋大学教授（文学部）
平成12年4月 名古屋大学教授（大学院文学研究科）
平成16年4月 名古屋大学大学院文学研究科副研究科長
（～平成16年10月31日）
平成16年11月 名古屋大学大学院文学研究科長・文学部長
（～平成18年3月31日）
平成18年4月 名古屋大学理事（教育関係担当）・副総長
（～平成20年3月31日）

●副総長（産学官連携関係担当）

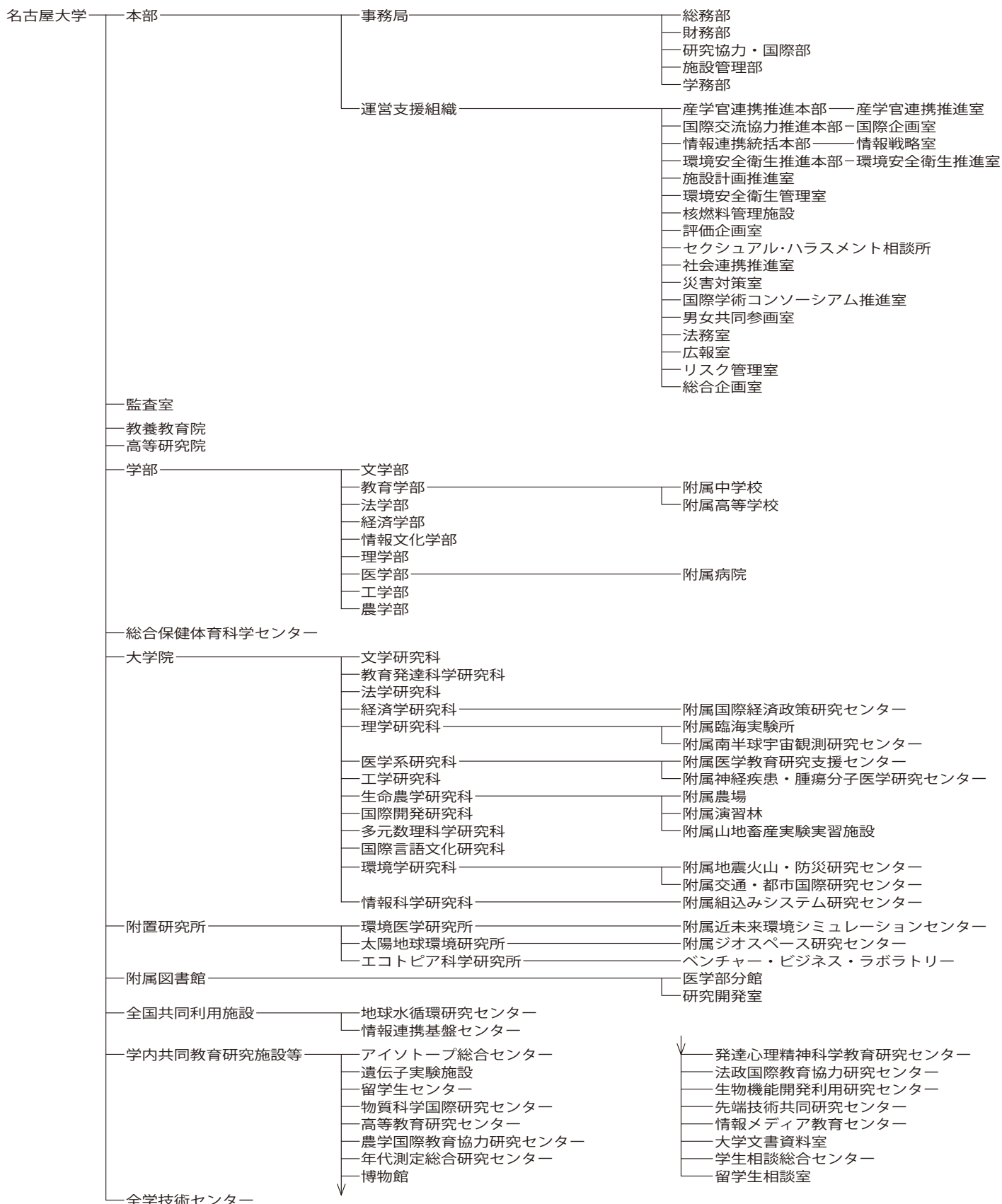


宮田 隆司
(みやた たかし)
専門分野：材料強度学、破壊力学

〈略歴〉
昭和47年4月 名古屋大学講師（工学部）
昭和49年4月 名古屋大学助教授（工学部）
平成2年6月 名古屋大学教授（工学部）
平成9年4月 名古屋大学教授（大学院工学研究科）
平成16年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員（～平成17年3月31日）
平成16年4月 名古屋大学大学院工学研究科副研究科長
（～平成17年3月31日）
平成18年4月 名古屋大学副総長（産学官連携関係担当）
（～平成20年3月31日）

平成18年度名古屋大学組織図

平成18年4月1日現在



[運営支援組織の強化]

- ・ 総合企画室の設置
- ・ 監査室の設置
- ・ 産学官連携推進本部に産学官連携推進室を設置
- ・ 国際交流協力推進本部の設置
- ・ 情報連携統括本部及び情報戦略室の設置
- ・ 環境安全衛生推進本部及び環境安全衛生推進室の設置
- ・ 環境安全衛生管理室の設置

[教育・研究組織の強化]

■ 附置研究所の設置

- ・ エコトピア科学研究所の設置

■ 学部・研究科等の組織再編

- ・ 農学部学科改組（2学科→3学科）

- ・ 大学院工学研究科の講座再編（協力講座の設置）
- ・ 大学院国際開発研究科の講座再編（基幹講座の統合及び講座名称の変更）
- ・ 環境医学研究所の改組（3研究部門→2研究部門）
- ・ 環境医学研究所附属近未来環境シミュレーションセンターの設置（附属宇宙医学実験センターの廃止）

■ 附属センターの設置等

- ・ 大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターの設置（附属国際経済動態研究センターの廃止）
- ・ 大学院理学研究科附属南半球宇宙観測研究センターの設置
- ・ 大学院環境学研究科附属交通・都市国際研究センターの設置
- ・ 大学院情報科学研究科附属組込みシステム研究センターの設置

受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H17. 3.20	第13回日本コンピュータ外科学会 2004年度講演論文賞最優秀賞	大学院工学研究科教授	生田 幸士	大橋竜也（大学院工学研究科 M2）他2名と連名
H17. 3.20	第13回日本コンピュータ外科学会 2004年度講演論文賞	大学院工学研究科教授	生田 幸士	中井高久（大学院工学研究科 M2）他1名と連名
H17. 6.15	IEEE Workshop on Advanced Robotics and its Social Impacts Distinguished Presentation Award	COE 研究員（21世紀 COE プログラム「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」）	山田 章	
H17. 9. 9	第10回国際超電導エレクトロニクス会議2005 最優秀ポスター賞	大学院工学研究科助手	赤池 宏之	山田隆宏（大学院工学研究科 D3）、藤巻 朗（大学院工学研究科教授）他5名と連名
H17.11.28	日本農学進歩賞	大学院生命農学研究科助手	吉村 崇	
H17.12.14	有機合成化学協会 万有製薬研究企画賞	大学院工学研究科講師	坂倉 彰	
H17.12.17	計測自動車制御学会 SI 部門 学術業績賞	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H18. 1.10	日本化学会 欧文誌論文賞	大学院工学研究科教授	高木 克彦	
H18. 1.12	大気化学研究会 奨励賞	太陽地球環境研究所助手	高橋 けんし	
H18. 1.14	計測自動車制御学会中部支部 第36期支部賞奨励賞	大学院工学研究科助手	松野 隆幸	
H18. 1.19	World Young Fellow Meeting 2006 Presentation Award	大学院工学研究科助手	増田 佳丈	
H18. 2. 3	第22回井上研究奨励賞	日本学術振興会特別研究員 （太陽地球環境研究所）	横山 竜宏	
H18. 2.18	日本木材学会賞	大学院生命農学研究科助手	吉田 正人	
H18. 2.27	平成17年度表面技術協会 協会賞	エコトピア科学研究所教授	高井 治	
H18. 3. 1	Distinguished Service Award for IEEE Chapter Activities	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H18. 3. 7	第16回読売東海医学賞	大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授	高橋 雅英	
H18. 3. 8	情報処理学会 学会活動貢献賞	大学院情報科学研究科教授	安田 孝美	
H18. 3. 8	情報処理学会 平成17年度フェロー	大学院情報科学研究科教授	吉川 正俊	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H18. 3. 8	GSC ポスター賞	大学院工学研究科助手	増田 佳丈	
H18. 3.17	第14回やまなし文学賞（研究・評論部門）	大学院文学研究科教授	坪井 秀人	

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H17.11.16	財団法人電気科学技術奨励会 電気科学技術奨励賞	全学技術センター技術専門 職員（工学技術系）	高田 昇治	

学生

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H17. 5.26	第40回日本理学療法学会 優秀賞	大学院医学系研究科 D2	笹井 宣昌	
H17. 5.26	第40回日本理学療法学会 大会奨励賞	大学院医学系研究科 M2	大野 善隆	宮津真寿美（医学部助手）、木山喬博（医学部助教授）と連名
H17. 9.27	生体医工学シンポジウム2005 ベストリサーチアワード	大学院工学研究科 D3	池内 真志	生田幸士（大学院工学研究科教授）と連名
H17.10.21	第9回スターリングサイクルシンポジウム ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 D2	田代 雄亮	
H17.12. 5	日本燃焼学会 ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 M2	石井 大祐	山本和弘（大学院工学研究科助教授）、山下博史（大学院工学研究科教授）と連名
H17.12. 5	日本燃焼学会 ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 M1	大坂 侑吾	小林敬幸（エコトピア科学研究所助教授）、M. A. Razzak（大学院工学研究科 D3）、大野哲靖（エコトピア科学研究所助教授）、高村秀一（大学院工学研究科教授）と連名
H17.12.18	2005環太平洋国際化学会議 Pacificchem 2005 Student Poster Competition Award Winner	大学院工学研究科 D2	板倉 剛	笹井 亮（エコトピア科学研究所助手）、伊藤秀章（エコトピア科学研究所教授）と連名
H17.12.18	2005環太平洋国際化学会議 Pacificchem 2005 Student Poster Competition Award Winner	大学院工学研究科 D2	三浦 悠	
H17.12.18	2005環太平洋国際化学会議 Pacificchem 2005 Student Poster Competition Award Winner	大学院工学研究科 M2	永井 寛嗣	
H17.12.26	土木学会平成17年度全国大会 第60回年次学術講演会優秀講演者	大学院工学研究科 M2	島田 和哉	井上 康（大学院工学研究科助手）、片山新太（エコトピア科学研究所教授）と連名
H18. 1.10	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 D2	竹田 圭吾	
H18. 1.10	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M2	中村 和博	
H18. 1.10	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M2	齋藤 智英	
H18. 1.10	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M2	坂下 洋平	
H18. 1.10	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M2	堀田 芳彦	
H18. 1.10	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M1	佐原 賢吾	
H18. 1.10	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M1	高木 佑輔	
H18. 1.10	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M1	堀田 裕隆	
H18. 1.24	平成17年度電気関係学会東海支部連合大会 奨励賞	大学院情報科学研究科 M1	佐藤 准嗣	高橋友和（日本学術振興会特別研究員（大学院情報科学研究科））、井手一郎（大学院情報科学研究科助教授）、村瀬 洋（大学院情報科学研究科教授）と連名
H18. 2. 6	第3回キャンパスベンチャーグランプリ中部 中部経済産業局長賞	工学部4年	飯田 斉	
H18. 3.10	International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia ポスター発表賞	工学部4年	橋本 徹	
H18. 3.11	第8回化学工学会学生発表会優秀賞	工学部4年	菊本 俊介	二井 晋（大学院工学研究科助教授）、川泉文男（大学院工学研究科教授）と連名

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
1 第2回キャンパスベンチャーグランプリ全国大会に飯田齊さん・本学学生が出演	2.17 (金)	日刊工業
2 生活習慣病予防講演会「肥満を防ぐ生活習慣」19日に開催 愛知学院大学・佐藤祐造・本学名誉教授、室原豊明・医学系研究科教授らが話す	2.17 (金)	中日 (朝刊)
3 跳ベミキティ：安藤美姫選手の演技をビデオ解析した池上康男・総合保健体育科学センター教授は、「4回転に必要な回転速度と滞空時間を同時に得られるのは、女子では安藤選手だけ」と話す	2.17 (金)	朝日 (夕刊)
4 目耳録：平野真一総長は学生らに自身がうつ病だった経験を、「恥だとは思わない。あのことがなかったら、今の自分はなかった」と語る	2.17 (金)	中日 (夕刊)
5 17日、財団法人東海学術奨励会が2005年度の研究助成金贈呈式を行い、平野真一総長が「研究成果がさらに伸び、社会に貢献することを望んでいる」と研究者を激励した	2.18 (土)	中日 (朝刊)
6 地球教室「石器を作ろう」3月18、19日に博物館で開催	2.18 (土)	朝日 (朝刊)
7 平安末期の僧、俊寛の書と伝えられる古今和歌集の写本「三輪切」を年代測定総合研究センターの放射性炭素年代測定法で調べた結果、俊寛の死から約2世紀後の14世紀に書かれたものと判明 小田寛貴・年代測定総合研究センター助手は、「古文書の筆跡研究はかなり信ぴょう性が高く、これまでのところ、科学的な年代測定の結果とほぼ一致している」と説明する	2.19 (日)	毎日 (朝刊)
8 第二の地球を探せ：村木綾・太陽地球環境研究所教授は、2005年夏にニュージーランドで運用を始めたばかりの望遠鏡を使って、地球に似ている惑星を初めて発見し、「幸運の女神がほほ笑んだとしか言いようがない」と話す	2.19 (日)	日経 (朝刊)
9 名古屋市美術館が有料カタログに2作品を無断掲載していたことが判明 鈴木将文・法学研究科教授は「美術品を扱う以上、著作権に関してはもっと注意を払うべきだ」と指摘	2.19 (日)	読売
10 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 捨身飼虎図の源流	2.19 (日)	中日 (朝刊)
11 小林孝彰・医学系研究科講師、農業生物資源研究所らは、臓器移植成功のカギを握る拒絶反応を抑える2種類の遺伝子を組み込んだ新しい遺伝子組み換えブタを作り出した	2.20 (月)	日経 (朝刊)
12 公開シンポジウム「三河湾の漁業と海産資源のむかしと今」3月12日に開催 西條八東・本学名誉教授、山梨県考古博物館館長・渡邊誠・本学名誉教授らが語る	2.20 (月) 3.13 (月)	中日 (夕刊) 朝日 (朝刊)
13 情報文化学部と名古屋環境取引所は、温暖化ガスの排出権と省エネ技術を組み合わせた取引実験を23日から行い、今夏の実現を目指す	2.21 (火) 2.22 (水)	朝日 (朝刊) 読売
14 訃報：小寺武久・本学名誉教授	2.21 (火)	毎日 (朝刊) 他5社
15 豊田工大ハイテク・リサーチ・センター「ナノ格子新技術開発研究センター」シンポジウムが3月3日に開催 篠原久典・理学研究科教授の招待講演など	2.21 (火)	中日 (朝刊)
16 3月に「名古屋大学基金」を創設 目標は200億円 募集を推進する「支援会」の会長にトヨタ自動車名誉会長・豊田章一郎・全学同窓会会長が就任	2.22 (水) 2.23 (木) 3.1 (水) 3.3 (金)	中日 (朝刊) 他5社
17 ロビー：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授は、「名古屋大学が国際的に存在感を示しているかどうか疑問だ」と苦言 欧米では国境を越えた人材の登用が国力に直結していると解説し、本学に奮起を促す	2.22 (水)	日経 (朝刊)
18 21日、加藤鉦治・大学文書資料室長の後任に羽賀祥二・文学研究科教授を選出し、渡邊豊英・情報連携基盤センター長と西澤邦秀・アイソトープ総合センター長を再任した	2.22 (水) 2.24 (金)	朝日 (朝刊) 他2社
19 名古屋中国語学院 (学院長・平井勝利・本学名誉教授) が中国語スピーチコンテストの参加者を募集	2.22 (水)	中日 (朝刊)
20 JAXAは赤外線天文衛星アストロFを搭載したM5ロケット8号機の打ち上げに成功し、衛星を「あかり」と命名 「あかり」に搭載されている赤外線観測装置を開発した芝井広・理学研究科教授は、ロケットの軌跡を眺めながら「すべて正常。完ぺきに近い打ち上げだ」と喜んだ	2.22 (水)	毎日 (夕刊)
21 本学卒業生で現在、金城学院大学や愛知県立大学などで非常勤講師を務める梅田百合香さんが、英国の思想家トマス・ホプズの著作を論じた研究書「ホプズ 政治と宗教～『リヴァイアサン』再考」を名古屋大学出版会から出版	2.22 (水)	朝日 (夕刊)
22 公開レクチャー「映像の記憶／記憶の映像 情報文化教育におけるアートとサイエンス」28日に開催	2.22 (水)	朝日 (夕刊)
23 「中世史研究会の卒業論文発表会」3月4日に開催 本学や三重大学などの学生が語る	2.22 (水)	中日 (夕刊)
24 内定先の決まった学部4年生と大学院生の有志からなる本学のユニークな学生グループ「就活サポーター」は、就職支援室の一角を借りて交代で待機し、訪れる後輩に経験談やアドバイスを行っている 今年は過去最高の47人のメンバーで昨年10月から2月末まで活動 船津静代・学生相談総合センター助手は「社会に出て役立つ自己教育になる」と話す	2.23 (木)	毎日 (朝刊)
25 22日、山本一良・情報メディア教育センター長を再任した	2.23 (木)	中日 (朝刊)
26 事業批判にめげず土木技術者の誇りを持って仕事をしようと呼びかける集会在21日に本学で開催され、映画「民衆のために生きた土木技術者たち」が上映された	2.23 (木)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
27 NPO 関連予算学会が25日に開催 後房雄・法学研究科教授らが先進事例の報告、討議などを行う	2.23 (木)	中日 (朝刊)
28 IT 技術を活用し、急性期、回復期、介護療養期をスムーズにつないで患者本位のサービスを目指す「シームレス医療」の取り組みが本学などの産学共同体で進められている 2004年に設立された東海医療情報ネットワークコンソーシアムの会長を務める吉田純・医学系研究科教授は、名古屋市で開かれたセミナーで、「病院中心から患者・市民中心の連携医療を確立していく必要がある。新しい医療情報ネットワークの開発と実用化、産業化を目指したい」と訴えた	2.24 (金)	中日 (朝刊)
29 岩谷直治記念財団は、2005年度の岩谷科学技術研究助成金の対象に、琵琶哲志・工学研究科助手ら17人を選定	2.24 (金)	日刊工業
30 講演会「生活習慣病の今 はじめよう健康生活への第一歩」26日に開催 杉浦康夫理事の司会で大磯ユタカ・医学系研究科教授らが話す	2.24 (金)	中日 (朝刊)
31 この国のみそ：林上・環境学研究科教授は、「笹島ステーション」の位置が「名古屋に発展をもたらした」と話す	2.25 (土)	中日 (朝刊)
32 第46回全日本学生グライダー選手権が3月4～12日に埼玉県で開催 本学を含む16大学の20チーム、47人が出場	2.25 (土)	朝日 (朝刊)
33 大学院工学研究科創造工学センター「第2回モノづくり市民公開講座 メタルクラフト (モビール)」3月29、30日に開催	2.25 (土)	朝日 (朝刊)
34 国立大学の二次試験前期日程が25日に行われ、中部地方の各大学では、社会情勢や世相を反映した問題が多く出題された 本学でも、英語で「大地震が発生したときの鉄則」を英訳する問題が、理科では「インド洋大津波のメカニズムについて」、法学部の小論文ではアメリカが強大な権力を持つ現在の世界の政治状況について論述させる問題などが出題された	2.26 (日)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
35 ほとけたちのイメージを探る：宮沼昭・文学研究科教授 光り輝く仏陀の予言	2.26 (日)	中日 (朝刊)
36 書評：「他人を見下す若者たち」速水敏彦・教育発達科学研究科教授著	2.26 (日)	日経 (朝刊)
37 第15回漢方シンポジウム「老いに伴う病氣と漢方の話」が26日に開催され、井口昭久・医学部附属病院長の講演などが行われた	2.27 (月)	読売
38 尾張旭国際交流会の「国際交流クッキングパーティー」が26日に開催され、万博の国連館に勤務していたムサイフ・ターライベクさん・本学留学生が尾張旭市民らにキルギス料理を教えた	2.27 (月)	中日 (朝刊)
39 本学は、漕艇部が使う艇庫兼合宿所を寄贈した漕艇部同窓会「艇友会」と、ボクシング部の練習場を寄贈した会社代表の磯部佳子さんに感謝状を贈った	2.28 (火)	中日 (朝刊)
40 第12回高等研究院セミナー28日に開催 笹井理生・情報科学研究科教授と森郁恵・理学研究科教授が講演	2.28 (火)	中日 (朝刊)
41 大学院文学研究科シンポジウム「源氏・賢治・ジュリエット」3月4日に開催 高橋亨・文学研究科教授、松澤和宏・同教授、滝川睦・同教授が講演	2.28 (火)	中日 (朝刊)
42 愛・地球博で使用していた看板類31基を、博覧会協会から無償で譲り受ける 化粧直しをして、地下鉄の出入り口や本部棟近くなどに設置する予定	3. 1 (水)	読売
43 トムソンサイエンティフィック社が、2004～2005年度、引用回数が多く、影響力の大きい科学論文の世界ランキングを発表 飯嶋徹・理学研究科助教授と岡部壮志さんが論文6本でトップ21に入った	3. 1 (水)	朝日 (朝刊) 日刊工業
	3. 7 (火)	中日 (夕刊)
44 永田議員会見 識者はこう見る：後房雄・法学研究科教授コメント「執行部よりもうひとつ上の世代の議員たちに協力する姿勢がない。党が一致団結してたたかう姿勢が見えないと、党の信頼を損なうことになる」	3. 1 (水)	朝日 (朝刊)
45 「名古屋歴史科学研究会の例会」11日に開催	3. 1 (水)	中日 (朝刊)
46 アーティスト・リンク「アースムーヴ」が16日に音楽演奏、映像、ダンス、朗読などを組み合わせた舞台を上演 ダンサーの大塩立華さん・本学学生は「イメージを共有しつつそれぞれの立場で作品づくりができた」と話す	3. 1 (水)	中日 (朝刊)
47 研究スポット：バイオロボティクス学 医工連携での成果を狙うため、医学部に「先端医療バイオロボティクス学」の寄附講座を新設	3. 3 (金)	中日 (朝刊)
48 アイソトープ総合センター防災訓練が、3日、大学職員と千種消防署員ら105人、消防車10両が参加して行われた	3. 4 (土)	中日 (朝刊)
49 独自の遺伝子ルーツを持つ「飛騨びと」の存在を検証するため、遺伝子実験施設や東京大学などが連携して、岐阜県飛騨地方に住む人たちのDNA解析に取り組み始めた	3. 4 (土)	中日 (朝刊)
50 独立行政法人教員研修センターは、平成18年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラムの教育課題研修に、本学の「参加型授業研究会を基盤とする校内研究のリーダー育成」など15件を採択	3. 4 (土)	中日 (朝刊)
51 「地震・防災フォーラム2006」が2月11日に開催され、建築家の安藤忠雄さんの基調講演や福和伸夫・環境学研究科教授らによるパネルディスカッションが行われた	3. 4 (土)	中日 (朝刊)
52 名古屋公衆医学研究所が、集団検診研究開発助成金を井澤英夫・医学系研究科助手、丹羽康正・医学部附属病院講師、榊原久孝・医学部保健学科教授ら15件の研究に贈呈	3. 5 (日)	中日 (朝刊)
53 健康セミナー「生活習慣病にならないための健康法」18日に開催 益田雄一郎・医学部附属病院医員が話す	3. 5 (日)	中日 (朝刊)
54 37歳、異色の新米教師奮闘：中学1年の通知票がオール1、九九も言えなかった宮本延春さんは、ビデオで見たアインシュタインの理論に衝撃を受け、猛勉強の末に27歳で本学理学部に入學、学部と大学院で9年間過ごし、「自分の経験が一番役立つ仕事は教師ではないか」と、現在、数学教師として教壇に立っている	3. 5 (日)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
55 AO 入試体験記：森下亜沙美さん・教育学部附属高校生 生徒 エントリーシートで夢や意識の高さをアピール	3. 6 (月)	中日 (朝刊)
56 高橋雅英・医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授が第16回読売東海医学賞を受賞 7日に 行われた授賞式には、共同研究者の中部大学学監・中島泉・本学名誉教授らも出席	3. 7 (火) 3. 8 (水)	読売
57 名大サロンの主役：鈴木國文・医学系研究科教授 近代「うつ」は他責的に	3. 7 (火)	中日 (朝刊)
58 「パレスチナレポート～パレスチナの現状と中東の行方」12日に開催 中西久枝・国際開発研究科教授とバッセム・ イード・パレスチナ人権監視グループ代表が話す	3. 7 (火) 3.13 (月)	中日 (朝刊)
59 シンポジウム「災害弱者をどう救うか—外国人への情報提供を考える」18日に開催 田中京子・留学生センター 助教授、木村玲欧・災害対策室助手らのパネルディスカッションなど	3. 7 (火)	中日 (朝刊)
60 名古屋学生映画祭11、12日に開催 本学など名古屋近郊の大学映画サークルが自主制作した映画を上映	3. 7 (火)	中日 (朝刊)
61 愛知県産業技術研究所は2006年度から「環境」をテーマにした2つの新規研究を始める その一つである「名古屋 大学などとの地域連携による水質浄化の研究」は、本学や名古屋市との間で合意したエコトピア研究の一環で取 り組む	3. 8 (水)	日刊工業
62 アルゼンチン・タンゴと日本：西村秀人・国際開発研究科助教授	3. 8 (水)	朝日 (夕刊)
63 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 会話のズレこそ潤滑油	3. 9 (木)	朝日 (朝刊)
64 9日に前期日程試験の合格者を発表 1462人の募集人員に対し、4465人が受験 合格者は9学部で1589人	3. 9 (木) 3.10 (金)	朝日 (夕刊) 中日 (夕刊) 読売
65 本学や理化学研究所などが参加する厚労相研究班等が、再生医療にES細胞を使わない研究成果を日本再生医療学 会で発表	3. 9 (木)	日経 (夕刊)
66 上坂裕之・工学研究科助手、飯田齊さん・工学部学生らのチームは、高密度プラズマを微小金属管の内面に沿って 直接生成することに成功	3.10 (金)	日刊工業
67 金融の量的緩和政策の解除：家森信善・経済学研究科教授は、「解除は時期尚早だが、解除自体は、経済に大きな 影響を与えない。今後の焦点は、いつゼロ金利政策から離脱するかである」と話す	3.10 (金)	中日 (朝刊)
68 検視に立ち会う医師の技量向上を目的とした研修会が名古屋市内で11日から4日間の日程で開催される 勝又義直・医 学系研究科教授らが講師となり、具体的な症例や異状の見分け方などを研修する	3.10 (金)	読売
69 東海地方2月の地震：林能成・災害対策室助手	3.10 (金)	読売
70 本学と岡山大学の法科大学院の院生らが10日、民事模擬裁判の「対抗戦」を行う 大学対抗形式の模擬裁判は国 内では初めて 稲垣遼さん・法科大学院2年生は、「証人に質問の意図がはっきり伝わるよう、仲間と練習を重ね たが、実際にやってみるとなかなか難しかった」と話す	3.10 (金) 3.11 (土)	朝日 (朝刊) 他3社
71 てんかん治療研究振興財団の2006年度研究功労賞を渡邊一功・本学名誉教授が受賞	3.10 (金)	日刊工業
72 UFJ セントラルリースによる寄附講義「環境問題への挑戦」を4月から3年間開講 一般市民に開放し、学内外の 専門家が講義する	3.11 (土) 3.15 (水)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊) 読売
73 森英樹理事の最終講義が11日に開催され、学生、卒業生、市民ら約300人が聴講	3.12 (日)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊)
74 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 仏陀を取りまく人々	3.12 (日)	中日 (朝刊)
75 モアゼム・ホセインさん・元医学部留学生在がバングラデシュの首都ダッカで運営する総合病院「アイチホスピタル」 の開院10周年を記念した写真展が11日から18日まで開催される	3.12 (日)	中日 (朝刊) 他2社
76 産業技術総合研究所などとの共同研究チームは、フルカラーの曲げられるフィルム状の電子ペーパーを開発	3.13 (月)	日経 (朝刊)
77 時のおもりの：早稲田大学教授・池内了・本学名誉教授 論文捏造の背景に成果至上主義 徹底した倫理教育が肝要	3.13 (月)	中日 (朝刊)
78 「数理ウェーブ」25日に開催	3.13 (月)	中日 (朝刊)
79 東海3県の国公立大学の医学系教授18人が31日で退官・退職 本学は勝又義直・医学系研究科教授ら3人	3.14 (火)	読売
80 学生街ダンス：渡辺宙志さん・本学学生 高校生に生の情報と学問の楽しさを伝える「H to U」	3.14 (火)	中日 (朝刊)
81 勝又義直・医学系研究科教授が3月31日付けで警察庁科学警察研究所長に起用される 勝又教授は「一般市民が 分かりやすく判断できるデータを提供し、理解されるように力を尽くしたい」と話す	3.14 (火)	朝日 (夕刊)
82 貝淵弘三・医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授と箱嶋敏雄・奈良先端科学技術大学院大学 教授らの研究グループは、血管を収縮させる特定の酵素の構造と働きの仕組みを解明 貝淵教授は「薬の設計に役 立ち、副作用がなく手軽に使える飲み薬の開発につながるだろう」と話す	3.15 (水)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 日刊工業
83 北川泰雄・生命農学研究科教授らは、脂肪組織中に含まれる分化能力の高い「間葉系幹細胞」が若年期の骨形成に 役立っているという仮説を打ち出した	3.15 (水)	日刊工業
84 叙位叙勲：従四位瑞宝中綬章 小寺武久・本学名誉教授	3.15 (水)	中日 (朝刊) 読売

第9回名古屋大学博物館特別展 「スポーツと名古屋大学：する・みる・つくる」

今回の特別展では、総合保健体育科学センター、名古屋大学体育会と連携し、スポーツ活動を大々的に取り上げ、広く紹介します。本学のスポーツの歴史、各運動部の紹介、スポーツ科学の検証、試合応援などのコーナーに加え、期間中には、関連特別講演会として、「スポーツ科学」を主題にした12回連続セミナーも開催します。

また、1932年のロサンゼルスオリンピック100m背泳で、清川正二氏（名古屋高等商業学校〔経済学部の前身〕）が獲得した金メダルをはじめ、貴重な品を展示します。

開催期間：3月22日(水)～9月30日(土) 日・月曜日休館
 開館時間：10時～16時（入館は15時30分まで）
 入場料：無料
 主催：名古屋大学博物館
 共催：名古屋大学総合保健体育科学センター、
 名古屋大学体育会
 協力：秩父宮記念スポーツ博物館
 問い合わせ先：博物館事務局 Tel.052-789-5767



博物館（野外観察園）の一般公開が始まる

博物館は、4月3日から、野外観察園の一般公開を始めました。ヒトツバタゴ（ナンジャモンジャ）やラクウショウ、ドングリの仲間など、様々な植物を大学構内で身近に観察できる場所が誕生しました。

博物館野外観察園は、東山キャンパスの南西にある4230㎡の緑地で、約40年前に造られた旧教養部生物学教室の実験圃場を母体としています。情報文化学部・大学院人間情報科学研究科の管理を経て、平成15年度から博物館が運営管理を行っています。散策路の整備や樹木札の設置も終

了し、今春より一般公開することになりました。

園内には、花壇や温室、池、雑木林などがあります。屋外には約600種の植物が生えており、野鳥や昆虫も豊富です。案内板やベンチの設置も進み、散策をしながら博物館野外観察園ならではの「生きた植物の展示」を楽しむことができます。5月20日の見学会を皮切りに、野外観察園を利用した観察会や実習もいくつか企画していますので、ぜひご参加ください。



整備された野外観察園の散策路

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

4月10日(土)～5月5日(金)

場 所：中央図書館4階展示室

時 間：10時～17時

休 館 日：4月27日

[問い合わせ先]

附属図書館情報管理課庶務掛

052-789-3667

附属図書館2006年春季特別展

テ ー マ：地獄物語の世界－江戸時代の法と刑罰－



4月17日(月)

場 所：環境総合館レクチャーホール

時 間：17時30分～19時

入 場 料：無料

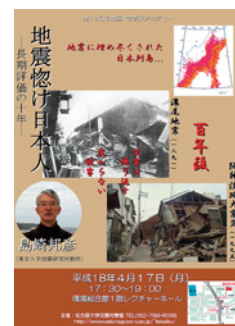
[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

第18回名古屋大学防災アカデミー

講 師：島崎邦彦 東京大学地震研究所教授

演 題：地震惚け日本人－長期評価の十年－



名大トピックス No.155 平成18年4月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL. 052-789-2016 FAX. 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

野依記念学術交流館1F
カフェラウンジ「BINAP-
cafe」より臨む新緑の木立。
(平成18年3月31日)

※今年度の表紙写真は、「キャンパスの風景」を紹介していきます。



48 揚輝荘衆善寮－戦前名古屋の留学生宿舎

今年1月、松坂屋創業家第15代伊藤次郎左衛門祐民氏の別荘である「揚輝荘」(名古屋市千種区)の主要施設が2007(平成19)年3月に名古屋市に寄贈されて一般公開されることが19日付け朝日新聞に報じられました。大正から昭和初期にかけて建設された揚輝荘は、覚王山日泰寺の東側に位置し、山荘風建築の「聴松閣」や和洋折衷建築の「伴華楼」などが有名です。

ところで、戦前この揚輝荘の敷地内には、主にアジアの外国人留学生が下宿していた衆善寮が設けられていました。戦前の名古屋には、アジアなどから多数の留学生が来日して、本学の前身諸学校である第八高等学校や愛知医科大学などで学んでいました。衆善寮の起源は、祐民氏が日本とタイとの友好事業の一環として名古屋日暹協会(のちの名古屋日泰協会)を設立して、1936年に3名のタイ人留学生を受け入れたことにあります。

その後、衆善寮では、モンゴル・中国・朝鮮民主主義人民共和国からの留学生も受け入れるようになり、日本人学生も入寮するようになりました。上坂冬子著『揚輝荘、ア

ジアに開いた窓』(1998年刊)には揚輝荘(衆善寮)における留学生の生活が描かれており、戦前期、日本とアジアとの関係が悪化する中であっても、衆善寮内では宮城遙拝もなく、スプーン・フォークも用意されており、自由で友好的な雰囲気が保たれていたとされています。また、食堂やテニスコートなどの施設設備も整えられており、専属の料理人も雇用されていました。これは当時の寮長であった三上孝基氏の人柄や尽力によるものであったといわれています。

揚輝荘は、1945年3月の名古屋大空襲の際に大半を焼失し、衆善寮も自然に廃寮となりました。

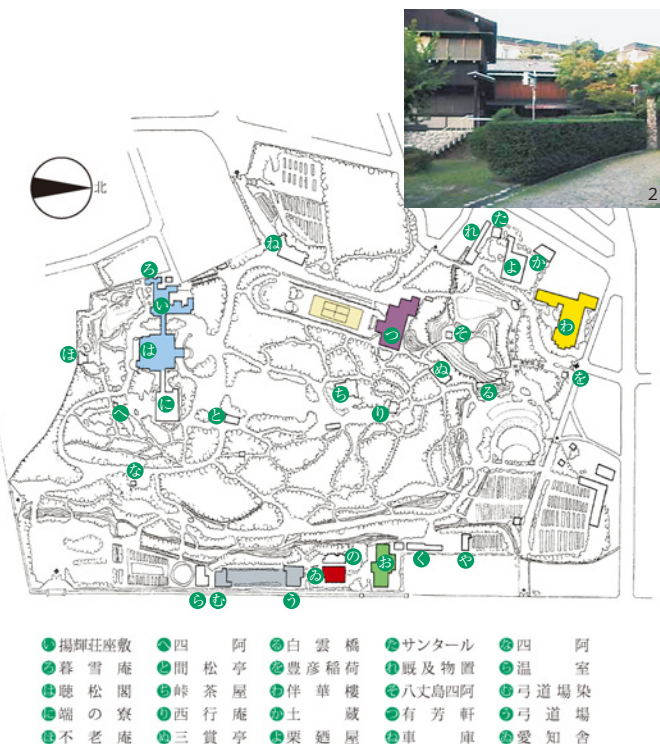
なお、当時の揚輝荘内には全長約1.5キロメートルにおよぶ地下トンネルが設けられていたことが知られていますが、その建設時期や目的などは今日も明らかではありませんが、三上寮長の日記には、戦時下の1944年3月に極秘来日した汪兆銘の療養場所としてこの地下トンネルの利用を打診されたという記録が残されているとのこと(2006年12月29日付中日新聞)。

揚輝荘の建物配置図

- わ [伴華楼] タイ留学生が生きていた建物
- お [衆善寮] 三上孝基寮長の家族と朝鮮人女性学生が生きていた建物
- あ 中国人留学生が生きていた建物
- い [揚輝荘座敷] 日本人学生が生きていた建物
- は [聴松閣] 同上
- つ [有芳軒] 食堂
- テニスコート
- う・む 弓道場



井上俊本学名誉教授のお話による



- ① 揚輝荘座敷
- ② 四阿
- ③ 白雲橋
- ④ サンタール
- ⑤ 四阿
- ⑥ 暮雪庵
- ⑦ 間松亭
- ⑧ 豊彦稲荷
- ⑨ 眠及物置
- ⑩ 温室
- ⑪ 聴松閣
- ⑫ 峠茶屋
- ⑬ 伴華楼
- ⑭ 八丈島四阿
- ⑮ 弓道場染
- ⑯ 端の寮
- ⑰ 西行庵
- ⑱ 有芳軒
- ⑲ 弓道場
- ⑳ 不老庵
- ㉑ 三賞亭
- ㉒ 栗廬屋
- ㉓ 車庫
- ㉔ 愛知舎

揚輝荘(ようきそう)の建物配置図 CD-ROM版「名古屋大学の軌跡—国際社会との知的交流—」より

- 1 聴松閣(ちょうしょうかく)「あいち地域資源デジタルアーカイブ」ウェブページより
- 2 伴華楼(ばんがろう)の全景「あいち地域資源デジタルアーカイブ」ウェブページより